特　集

第11回環境シンポジウム

生物多様性にどう取り組むか

－産業界、NGO、政府、それぞれの立場から考える－

「生物多様性」は長期的に人類の生存そのものと関わるだけではなく、観光・地域経済についても密接な関係性があります。そして、その損失を食い止めるため、各地域では様々な取り組みが進められています。本シンポジウムではサンゴ礁など生態系保全や里山保全への取り組みの意味を考えつつ、生物多様性について、政府、企業、NGO、そして我々がどのようにかかわっていくことが必要かを幅広く考察していきます。

シンポジウムコーディネーター：関谷直也（社会学部准教授）
（平成24（2012）年7月7日（土）於スカイホール）

関谷直也（社会学部准教授）

それでは、定刻となりましたので第11回東洋大学現代社会総合研究所環境シンポジウム「生物多様性にどう取り組むか－産業界、NGO、政府、それぞれの立場から考える－」を始めさせていただきたいと思います。私は本日司会とコーディネーターを務めさせていただきます東洋大学社会学部メディアコミュニケーション学科准教授、関谷直也と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

それではまず初めに、現代社会総合研究所企画委員長の石井晴夫経営学部教授より、開式の辞をいただきたいと思います。

石井晴夫（経営学部教授）

皆さん、こんにちは。土曜日の大変お忙しい中、そしてまたお足元の悪い中、お集まりいただきまして本当にありがとうございます。今回で第11回目の環境シンポジウムを本日開催することができました。これも、ひとえに皆様方のご支援、ご協力のたまものと心から感謝申し上げております。

今まで10回にわたりこの環境シンポジウムを進めてまいりましたが、この11回目から新たな内容でという議論も運営委員会のほうで進めてまいりました。ただ、こういう社会情勢の中で環境問題がますます重要視をされている状況がございます。そういった中で今年度は生物多様性の問題を原点に立ち返って取り上げようということを、現代社会総合研究所の運営委員会では何度か話し合いまして、本日の実現にこぎつけたところです。

本日の内容は大変多岐にわたり、そしてまた時宜を得たすばらしい内容であると思っております。また所長のほうからもお話がございますが、基調講演には金沢大学の香坂先生にお越しいただきました。この生物多様性の研究の第一人者でございます。お聞きしますと、もともとは林業がご専門ということだそうですが、いろいろ幅広く、マスコミ等でもご活躍をされておられます。その香坂先生にお越しいただきまして、東洋大学でこうした基調講演をやっていただけるということは、大変光栄なことでございます。

またパネリストとしましては、プログラムにございますように、博報堂広報室のCSRグループ長の川廷先生に本日、お忙しい中、お越しいただきました。本当にありがとうございます。そしてまたCo-Creation Harmony代表の岸先生でございます。そして、さらに独立行政法人国立環境研究所の浪崎先生、サンゴ礁の第一人者でございます。サンゴ礁から考えた地球規模での環境への取り組み、環境保全や保護、そういったグローバルな視点からもお話を賜れると思っております。

また本学からは、国際地域学部の東海林教授にパネリストとしてお越しいただきました。東海林先生もこの分野の専門家でございます。そういう中で全体を社会学部の関谷先生に、コーディネーターを務めていただけるということです。関谷先

生のご尽力で、すばらしい先生方を東洋大学にお迎えすることができました。関谷先生は私どもの研究所の運営委員でもございます。関谷先生、本当にありがとうございました。このプログラムの後ろのページに時間配分がございますが、全体的には5時半に終了ということです。大変短い時間ではございますが、実りのある、そしてまたこれから東洋大学がやるべき情報発信の非常に重要な観点からの環境問題をぜひ今日のこのシンポジウムを通じて、国内外に東洋大学から発信していきたいと思っております。皆様方の積極的なご質問やご意見を賜りたいと思っております。また後ほど関谷先生からもお話があると思いますが、皆様方には質問票等をお配りいたしますので、質問やご意見を賜りたいと思います。どうぞ今日は5時半までよろしくお願いいたします。開催に当たりまして企画委員長としての挨拶をさせていただきました。ありがとうございました。(拍手)

関谷直也

続きまして主催者側として現代社会総合研究所長の松園俊志・国際地域学部教授より、ご挨拶をいただきたいと思います。

松園俊志(国際地域学部教授)

本日は天候不順な中、ご参集いただきましてありがとうございます。私、現代社会総合研究所の所長をやっております国際地域学部の松園でございます。ここに初代の研究所長の山谷経済学部教授がいらっしゃいますが、現代社会総合研究所は設立当初から今回の第11回目まで一貫して環境問題を扱ってまいりました。今回は生物多様性ということにどう取り組むかということでシンポジウムを開催することになりました。リオサミット以降20年たったと思いますが、先月の6月20日からリオデジャネイロでリオ+20という会議がちょうど開催されたところです。生物多様性に関しての条約は、20年前のリオサミットで気候変動の枠組み条約と同じときに採択されたと、私は記憶しております。

そういう意味では、生物多様性というのは非常に地球の環境問題としては重要な部分を担っているわけです。この後、基調講演あるいはパネルディスカッションの中にも出るかと思いますが、生物多様性のための名古屋議定書というのが2010年にあったと思います。愛知ターゲットというのを定めたのが2010年だったと思います。いずれにせよ、ちょうどリオサミットからの+20ということで、時宜にかなったシンポジウムになるのではないかと思います。

今回は特にシンポジウムの基調講演等の中では、パネルディスカッションも大学の先生だけでなく、産業界の博報堂の川廷さんやNGOの岸さん、独立行政法人国立環境研究所の浪崎さんに、いろいろな角度からこのテーマに従って中身を論議していただいて、会場からも、先ほど石井晴夫先生から質問票を配るというようなご説明があったと思いますので、ぜひとも実りあるシンポジウムにしていただきたいと思っています。

最後に石井晴夫企画委員長と、今日の司会とパネルディスカッションのコーディネーターをやっていただく関谷先生には、企画のためにいろいろなご努力、ご尽力をいただいたことに感謝して、私の挨拶にしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

関谷直也

続きまして、東洋大学を代表いたしまして佐々木啓介副学長にご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

佐々木啓介(副学長・経済学部教授)

副学長の佐々木でございます。本日は第11回目の環境シンポジウム開催ということで、11回というのはかなり長い年月継続されていることになりますので、非常にうれしい限りでございます。やはり、こういうものは継続が最も大事と思っておりますので、本日のシンポジウムが11回目の開催になることを何よりうれしく思っております。

最初に、本日ご講演いただく先生、そしてパネリストの皆様に本学を代表して感謝申し上げたいと思います。そしてコーディネーションの労をとられた石井先生、松園先生を初め関係者の皆様にも本学を代表して心からお礼を申し上げます。

本日のタイトルは「生物多様性にどう取り組むか」です。残念ながら、私は経済学が専門ですので、この領域については門外漢になります。ただ

非常に重要なテーマなので、門外漢の私でもメディアを通して経済問題に絡む形で目にしたり、耳にしたり、やはり印象に残るような話もございます。以前、南米のある植物の成分が心臓病に効果があり、現在の医学の水準ではそのような成分を化学的に作り出せない、したがってその植物を採集することで、その成分を抽出して薬品を作るしかない、という話を聞きました。

ヨーロッパの幾つかの大手製薬企業がその植物の効果に気づき、患者はその薬を使うほか治療方法がないために、その植物を買い取るわけです。その植物が採取可能な地域は、日本人から見れば所得が低く、決して豊かとはいえない地域ですので、急速にその植物の採取が加速するわけです。そして大手製薬会社が買い取りを進めて行くわけですが、採取量の加速がその植物の存続の臨界点を超えるときがやって来ました。これ以上、採取を続けると絶滅するという状況に至ったわけです。この後のストーリーが非常に興味深い話で、今でも私の記憶に残っています。

南米のこの地域では、従来の仕事から得られる所得は低いので、この植物採集から得られる収入が彼らの生活を支えるようになりました。製薬会社は利潤追求企業ですが、この植物がこのまま絶滅してしまうと薬品を生産できなくなりますから、利潤を得られません。これは大変だというので、その巨額の収益からかなりの分を、その地元地域に還元するようになり、地元の人々はその資金を使って採り過ぎないように制度の設計、例えばパトロール組織などを構築して、一定の臨界点を決して超えぬようにしました。その結果、その植物の数が一定に保たれるようになった、というのが話の骨子です。

これは非常に興味深い話で、私は2つの点に関心を持ちました。1つ目は、このようなプランによって損失を受ける人がいないという点です。それは、地元の人々の所得を一定水準まで引き上げるメリットがありますし、そのような制度メカニズムを構築し、制度デザインをすることで、企業側もその薬品部門の利潤をゼロにしなくて済むわけです。両者が長期的な視野に立つと、このようになります。

2つ目は、非常に強い権限を持った政府当局者がこのシステムに明確な形で介入していない、という点です。つまり、漢字2文字で「共生」と呼ばれるシステムですが、共生システムで最も重要なのは、係わるプレイヤー、要するに参画する人々がすべて利することを可能にする安定的なシステム、あるいは安定的な制度スキームになっているという点です。その現場にいる人々から成るコミュニティー、そして企業サイドも、そういう意味で「保全」することで利することが可能になります。また、物言わぬ植物、動物、つまり自然と人間との共生という意味でも、本質にかかわる仕組み、システムです。ですから、生物多様性と共生は少し意味合いが異なるように感じますが、実は表裏一体となる重要なテーマであると改めて意識している所です。

今日は生物多様性というテーマで開催いたしますが、先ほどパネリスト、講演者の諸先生の会話を伺っておりますと、生物多様性の保全は、人間社会にとって重要なキーワード「共生」とも深いかかわりがあるようです。本日ご参会の皆さまにおかれては、是非、新たな知見、知識を吸収していただいて、本日開催の環境シンポジウムが一層実りあるものになることを心より願っております。本日は、どうもありがとうございました。(拍手)

関谷直也

ありがとうございました。続きまして基調講演に入らせていただきます。基調講演といたしまして「日本における生物多様性の取組み」と題しまして、香坂玲金沢大学大学院人間社会環境研究科准教授にお願いしたいと思います。 簡単に香坂先生の略歴をご紹介させていただきます。香坂先生は、国連環境会議において生物多様性条約の事務局職員を務められ、その後、名古屋市立大学に赴任され、生物多様性条約第10回締約国会議の支援実行委員会のアドバイザーを務められました。その後、今年度より金沢大学のほうに移られて、生物多様性に長年取り組まれております。著書として『いのちのつながり－よくわかる生物多様性－』、また最近出された本に『地域のレジリアンス－大災害の記憶に学ぶ－』があります。主

に、生物多様性の分野に関する日本における研究の分野での第一人者として活躍されています。それでは香坂先生、よろしくお願いいたします。なお、ご質問用紙をお配りしておりますので、基調講演が終わった後に一度回収させていただきます。ご質問のある方はご記入ください。それではよろしくお願いいたします。

香坂　玲（金沢大学大学院准教授）

皆さん、こんにちは。今日はお忙しい中、またお足元の悪い中、お集まりいただきましてありがとうございます。実は東洋大学には何度かお邪魔していますが、スカイホールというこんなすばらしい会場は初めてです。また、こうして地域に密着していろいろな方が行き来できるようなキャンパスをお持ちのすばらしい大学だと改めて感じました。125周年の長い伝統の中で、こういったさまざまな現代的な課題にも取り組まれる研究所などを積極的に設置され、その中で環境というテーマを議論していただけるということは大変心強く、また重要なことだと思います。今日、学生の皆様もいらっしゃるようでしたら、ぜひ今日はそういう大学で学べることを誇りに思っていただきたいと思います。環境問題というのは待ったなしの問題ですので、ぜひ今日はそういったことを若い方々にもシニアの方にも一緒に考えていっていただければと思います。

私は最初の30分ぐらいを日本の話ですとか、国際的な生物多様性の話をさせていただきます。最後にイギリスのキツネ狩りですとか、動物と人間の向き合い方、あるいは動物をめぐる社会の情勢をお話ししたいと思います。スライドの順番が若干入れかわっていることをあしからずご了承ください。

生物多様性条約のほうの話からぱぱっとやらせていただきます。後ほど川廷さんからもいろいろ補足、ご説明をいただけると思いますので、ここはさくっとやりたいと思います。皆さん若い方はまだお生まれになっていなかったかもしれませんが、1972年というとどんな年でしょうか。クイズで毎回やるのですが、今日はスライドが手元に配られているので答えが出ているという、なかなかやりづらい感じです。72年というと、あさま山荘事件とか、田中角栄が「日本列島改造論」をぶち上げた時期です。また札幌オリンピックが開催された年でもございます。実は偶然ですが、ザ・ブルー・マーブルと呼ばれる地球の写真が出回ったのも、この同じ1972年です。実際には69年から月面に行ったりいろいろなことが起きていましたが、我々が今すごく当たり前に見ているこの写真は、実は72年に割とぽーんと出たということを覚えておいていただきたいと思います。

よく環境の教科書などを読んでいると、こういった「地球って一つしかないんだよ」というような話で環境問題の盛り上がりを見たというような説明のされ方をしていることがあります。ただ72年というのは、かなり政治的な思惑も色濃く出て、環境というテーマが浮上していると私は思いますし、そういった文献もあります。何が言いたいかといいますと、確かにそういう環境、「地球は一つだよ」とか、青い地球が見られて皆さんの意識が高まった。

それもあるでしょうが、実際問題、冷戦という状況の中で、ソビエトがアメリカとあまり仲が悪くない時期であったとか、アメリカはベトナム戦争なんかをやっていて、政治的な議論よりも環境のことを少しテーマにしたいという思惑がうまく絡んで、実はこういった環境問題というものが浮上してきたということは、一つポイントにすべきものではないか。だから環境問題というピュアな自然現象であると同時に、実は最初からそういった政治とか社会の情勢とも極めてかかわり合いが深いテーマであったということが一つ言えるかと思います。そういったものとして、こういったデタントの時期であったことと、こういった思惑が少しあったことが関係していると思います。

70年代以降、どんな流れで例えば日本の国内の議論があったのかと申しますと、森林のほうの話ですが、結構当時の議論を見てみると発展途上国は人口も増えているし、住民の皆さんはすごく貧しいので、焼畑をしてしまう。そういった人たちの移住が必要だったり、あるいは何らかの形で森林と農業が両立できるようなアグロフォレストリーをやったらいいじゃないかという、かなり進歩主義というか。はっきり言ってしまえば現地の

人たちはわかっていないから、専門家とか日本とかヨーロッパとかアメリカの人たちが行って教えてあげたら環境はよくなるよという、そういう流れがすごく強かったですね。

ちょっとこれも企業との話で、後でいろいろないい話が出ても最初は多少批判的なことを言いますけれども、これなんかも現地の人たちが森をがんがん燃やしてしまっていますよと。とんでもないことですね、現地の人たちって本当にこういう貧困なんかよくないですねということを、石油会社の方が広告に出しました。これは大スキャンダルで、インドネシアとか書いてありますが、インドネシアで撮った写真ではなかったということが研究者によって指摘されて、コスモ石油が撤回に追い込まれたという一つの例です。

これは最近出てきた三菱商事さんの事例です。森林を呼び戻そうということで大変すばらしい広告だと思います。ただ、思い起こしますと80年代に日本はかなりたたかれました。その急先鋒にいたのが、熱帯林の破壊なんかですと商社というジャンルが一つありました。あまり企業名をばんばん出しているとあれですが、三菱商事さんの場合は、熱帯林の損失というのは地域の人たちが焼畑をやっているからなんですよという漫画を出版しました。これも本当にそうなのか、本当に地域の人たちが焼畑をやっているから熱帯林はなくなっているかという議論が起きました。

もちろん今はものすごくすばらしい取り組みをたくさんやられていますし、うちも三井物産の環境財団のおかげでいろいろな活動をさせていただいていますので、今でもそうだと言うつもりは全くございませんけれども、昔から企業が本当にそういうことをやっていたのかどうかというあたりはぜひ後で議論したいと思います。

住民による焼畑が原因だとする漫画、あれはどうなんだという議論になりました。しかし、よく考えたら我々が輸入している木材もかなり負荷をかけており、商業用の伐採もかなり負荷をかけている。焼畑と一言で言っても政府主導で無理やり移住させた人と、伝統的にずっと焼畑を営んできた人たちをごったにして議論していいのかどうかという、かなり複雑な問題だということを改めて認識するような議論の発端にはなっています。

ただ、そういうのをメディアの立場から言えば、商社は当時漫画を使って情報発信をして多少物議を醸したとか、コスモさんの場合は2000年代に入ってからですが、こういった事例がまだあります。環境と企業とメディアという観点から見ても、いろいろな議論が過去にはございました。これは日本だけではなくてドイツの例ですが、そういうのをはっきりとは言っていませんが、例えば政府の熱帯林の報告書などで、明らかな焼畑で、これはどう見ても多分現地の人だろう、しかもアジアじゃないかなと思わせるようなものがあったり。これもグリーンピースですが、自然破壊をしている人たちはだれなんだろうということを想起させるというか、明らかに連想させてくれるような中で、「やはり現地の人たちがやっているんじゃないの？」というようなメッセージがかなり色濃く出ているような例があります。

80年代にどういうことが起きていたのかというと、ドイツでは環境NGOの会員数がばーっと伸びています。当然一つは、関谷先生がお詳しい原子力の問題があって、チェルノブイリの事故があったわけですけれども、もう一つ、熱帯林の破壊というのが、会員獲得のときにかなり重要な役割を果たしているというか。熱帯林がこのままなくなっていっていいのかというような論調で、グリーンピースなんか見てください。ウナギ上りそのもので、我々がバブルに酔っていたころに、ドイツではかなり緑系の組織が会員数をふやして勢いづいています。多分、アメリカは70年代にもう少し伸びていたり、少し違う動きをしているはずです。ヨーロッパについては80年代というのが非常に重要な時期でした。

話は戻りますが、72年の会議があって、その間の20年というのが、環境にとってはかなり重要な20年だったのではないかと思います。92年というとどんな年だったか。20年後の会議の話ですが、PKO法案とか、すみません、石川県なものですから松井がどうだったかというのを書かせていただきました。5打席連続で敬遠されたとか、覚えていますか。あとユーゴスラビアが解体されたりということがありました。それ以外にも、

これもちょっと関係しますが、冷戦が終わって南北問題が激しくなりました。実は南北問題というのはずっとありましたが、特に92年以降は顕在化してくることがあったのではないかと思います。

72年の会議のときはアメリカがどうだった、ソビエトがどうだったという対立構造というのをすごく聞いていましたが、92年のときに非常にクリアになってくるのがこの南北間の争いです。これが当時12歳で演説をして有名になったセヴァン・スズキさんで、伝説のスピーチと呼ばれるものです。当時、地球の直し方も知らないのに地球を壊し続けるのをやめてくださいと訴えたデヴィット・スズキさんの娘のセヴァン・スズキさんです。東西から少し南北に対立軸がシフトしたのかなという形です。

先ほど松園教授からもお話がございましたが、この92年の会議で気候変動枠組条約と生物多様性条約の署名が開始されたということになります。実際に発効とか批准がされていくのが93年とか94年ということになってきますが、条約が誕生しています。ただ、これは皆さん意外と知らないのですが、実はもう1個条約があります。砂漠化防止条約（国連砂漠化対処条約）というのがあって、双子というよりも三つ子ですが、砂漠化防止のほうは非常にうまくいっていない条約の事例です。途上国が割と要求してつくった条約だったのですが、あまりうまくいっていない。

あとはもう1個、あまり知られていないのですが、誕生しようとして誕生できなかった条約というのがあります。ご存じですか。実はリオの会議でできる予定でできなかったものがありました。それは森林条約というか、どういうネーミングになるかわからなかったのですが、世界規模での森林の条約をつくろうとして、つくれませんでした。これはやはり途上国が先進国と同じような物差しで進捗状況や状況を把握されて、最終的には自分たちの資源の使い方に口出しをされてしまうのではないかと非常に懸念して、この条約はできなかったということです。

何となくさらっと聞いていると、92年に大きい会議があって政府が条約をつくったんだねという話ですが、必ずしも予定調和でちゃんと条約が全部できることが最初から決まっていて合意できたわけではなくて、例えばそうやって条約をつくる頭でいたけれども、最終的には原則声明とか議長がごちょごちょと言って終わってしまうような案件もあったという意味では、すごく意義の深い会議だったと言えると思います。

今の環境問題などを読み解いていく上でも非常に重要になるキーワードが、このときの会議の言葉であって、共通の責任（common responsibility）と、共通だけれどもそこに差がある（common but differentiated responsibility）という言い方です。先進国はもう環境問題なんだから、先進国も途上国もみんなでやりましょうと言ったのに対して、途上国は例えばこれまでの累積の温暖化ガスを出してきたのはどこなんだとか、これまで熱帯林を壊してきたのはどこがやってきたんだということを考えれば、確かに我々共通の責任はあるけれども、そこの責任のとり方とか行動の仕方は差があってしかるべき。つまりまずは先進国から行動を起こせとか、あるいは技術移転、資金移転をしなさいということを主張したということが、この言い方です。

これが当時のG7と呼ばれるグループと、中国・インドなどを代表格にしたグループ77（G77）、途上国はそれだけ数が多いんだぞというグループが主となって主張したという、そういう対立関係です。基本的に今のいろいろな生物多様性条約や京都議定書の議論を聞いていても、こういう考え方、対立の軸は今でも色濃く残っていると思います。

あとこれは生物多様性にかかわるところですが、森の見方もその間少しずつ変わってきたのではないかと申し上げたいのですが、これは80年代にドイツで撮られた写真です。酸性雨の被害でドイツから21世紀になったら森がなくなってしまいます、このままではとんでもないことになりますよということで、世紀末的な絵として使われていました。

森林科学なんかが当時色濃く考えていたのは、どうやって治山をするか、土砂崩れを防いで木材をどれだけたくさん生産するかということです。

だからこういう倒木があるのは作業の邪魔ですし、害虫も発生するし、よくないものだという見方が色濃かったのですが、だんだんそれが、森林というのは木材を生産するだけの場所ではないよね、二酸化炭素を固定したり、レクリエーションの面でいろいろな機能がありますねと、森林の見方も変わってきた。倒木についても、こういう森林破壊のものから、生物多様性の源とか、二酸化炭素を固定してくれるいい場所みたいに、いろいろな意味づけというか、多様化した見方をするようになりました。

これはすべての森がそうなれということではありませんが、倒木一つをとってもこういった倒木がある地域、場所というのは大事ですよ、美しいですねと、すごくその間、見方も変わってきたということが言えると思います。ですから、同じ自然の資源についても、こうやって生産の邪魔になるもの、あるいは倒れて危ないものとか、環境の被害で倒れてしまったものみたいな見方から、だんだんみんなで行くきれいな場所、美しいものというシンボルに、倒木一つとっても変わったということが、特にヨーロッパの場合は言えると思います。

これはバイレンの「みんなで国立公園に行こう」という写真ですし、こちらはドイツ鉄道が「みんなで国立公園に行こう」というキャンペーンの中で使っていたものです。NGO なんかも賛同して、こういう自然に近いような森ってとても大事ですねというメッセージを打ち出しているような例になっております。

ここでちょっと寂しい話です。今日お集まりの皆さんはご存じだと思いますが、先月環境の会議が一応ありました。72 年、92 年、2012 年。2012 年の今年は、リオ + 20 という会議が 6 月にございまして、グリーン経済や制度的な議論がされました。72 年と 92 年と比べて非常に影が薄かった会議で、多少日程的なこととかいろいろな要因があると思いますが、環境の問題というものがこういった会議と同様に下火にならないように、改めてどうやって取り組むのかということを我々は今日、あるいは今日以降も考えていかなければいけないのではないかと思います。

生物多様性条約の少し細かい話をします。生物多様性条約の目的というのはこのように保全と持続可能であるように利用していくということと、利益配分、遺伝資源、微生物なんかを使って得られた利益ですね。何か微生物の働きを使って得られたような薬、あるいは食品、化粧品、そういったものから出てきた特許、知識、お金というものをうまく配分していきましょうと。利益というのはお金だけじゃないんですね。そういったものも途上国も先進国もうまく配分していきましょうということを条約の中では目的として掲げられています。

その中でも保全に深いかかわり合いがある目的が、2010 年目標として、2002 年から条約の中で活動してきました。どんどん悪化している生物多様性の悪化のスピードにブレーキをかけていきましょうということが、この 2010 年目標だったわけですが、残念ながらこれは達成できなかったことが COP10、2010 年の会議で確認されました。ある意味では、第一目標という新しい目標に衣替えをしてまたさらに設定されたわけですが、年金と同様に将来世代に先送りしてしまった課題とも言えるのではないかと思います。

この愛知目標というものが掲げられるに至った経緯、つまり 2010 年目標が何で失敗してしまったのかということについては、こういったいろいろな要因がずらっと並んでいるわけです。技術が足りないとか、意思決定が細分化されているとか、情報、アクセスがなかったと。それに対して COP10 の中でどういう対処をしていくのかがいろいろ決められました。気候変動枠組み条約の中にある政府間パネルのようなものを設置していこうといったことですとか、愛知目標の中でいろいろ入れて、そういったものの改善を図っていこうといったことがやられたように、経済評価をやっていきましょうといったことが COP10 の中でも確認されて、今でもそういったプロジェクトが実施されているわけです。

こうして改めて見ますと、何で失敗したのかという要因に対して、この愛知目標というのがいろいろなものをカバーするように設定されているわけです。具体的に COP10 での主要な成果の一つ

としては、2010年以降の2020年に向けた目標をどうしていくのか。まさに今日のテーマでもありますが、2050年に向けてどう取り組んでいくのかについて、生物多様性分野についてそのロードマップと言えるものがこの愛知目標と言われるものになります。

お手元に配付したスライド以外の、こちらのほうの配布資料の中に、細かい一覧表がございます。今日は名古屋議定書の話はしませんが、愛知目標という形で現場で取り組めるようなさまざまな領域における課題を、いつまでにとれぐらいやるのかを決めているのが、この愛知目標ということになります。非常に緩やかな表現にはなっていますが、サンゴ礁であっても当てはまるものが入っておりますし、農業での活動であっても入ってくるものがある。そういった意味では、生物多様性分野のいろいろな場面でこの目標に向かって、いろいろな団体が取り組めるようなものになっていると言えます。

この愛知目標について大事なことは、各団体が「おれはこんなことをやりたい」とか「あんなことをやりたい」とか、政府が「こんなことをやる」「あんなことをやる」と言っている中でも、この目標については生物多様性条約に入っている国々は、やりますよと。最低限この方向性で行きますよということは確認しているということです。コミットしているという言い方でもいいと思います。各国が、これプラスアルファの活動をどんどんしていってもらうことはそれぞれの国のいいことなので、どんどんやっていってもらえばいいのですが、ある意味では最低限この目標に向かって活動していくということについては、条約に入っている180以上の国と地域がコミットしているという意味では、非常に重要なものだと言えると思います。

中でもヨーロッパなんかが非常に重視したのが、どれぐらいの重要な地域を保護区として、あるいは何らかの規制がかかっている地域にしていくのかというところで愛知目標の11と呼ばれるところですが、陸地の17%、海の10%を保護区にしていきたいと決めたということが、数値目標であるという意味ではかなり重視されています。

日本の政府も生物多様性国家戦略というものをまた改定いたしまして、今ちょうどオープンになって皆さんの意見を聞いているところですが、その中でもいつまでに何%、どれぐらい改善していくのかが入っているということが、大きな日本国内での戦略を見たときにも重要となってきますので、いつまでにどれぐらいをやるのかということが、2010年目標のときと比べて大きく改善されているという意味で、この愛知目標というものが今後の行動の一つの枠組みになってきています。これはこちらをごらんいただければいいと思います。

生物多様性条約というものの背景を、ざざっと早口でお話しさせていただきました。日本の取り組みについて少し、私が訪れた場所などを紹介しながら、あとはスライドショーみたいにお話ししますので、気軽に聞いていただければと思います。強いて言えばこういう目標の分野にかかわりが深いですよというところです。

これは気仙沼にお邪魔したときで、関谷さんも随分行かれていると思いますが、6月なので3カ月後ぐらいの状況です。11月にお邪魔したら、フカヒレとかの生産がまた戻っておりました。気仙沼横丁という形でお店も少しずつ戻っています。まだちょっと船とか周りにあったりしますが、お店が流されてしまった人などが集まってこういう仮設の商店街でまたお店を出したりということがやられています。水揚げが結構上がってきていますが、冷蔵あるいは冷凍してシーズンを持ち越すという施設が不十分な部分があって、なるべく揚がったものを売り切りといいますか、どんどん発送していってでも売っていきたいということをおっしゃっていて、ちょうど東京からレストランを経営している人も来て買い付けたりしていました。これは魚屋さんの例です。

大変だなと思うのは、現実的なことを言うと、これは別に行政がすごく支援してくれているわけではなくて、株式会社が運営しながら整備関係のところが土地を整理したりいろいろやってはくれましたが、基本的に家賃・電気代・ガス代などを払いながら復興、また再開されているということで、経済的にはそんなに楽ではないのではないか

と思いながらも、そういった取引を通じて自分がやっている、社会とつながっていると実感できるということがすごくやりがいに感じます。

そうやってお得意さんが戻ってきて、無事が確認できる場所として、単純に経済行為としての商品を売買するという関係だけではなくて、いろいろな人とのつながりを改めて再確認できる場として、規模は大分小さくなりましたが再開できたということはすごくうれしいとお店の方もおっしゃっていました。

こちらは石川県の春蘭の里というところです。農家民宿という形で、高齢化がどんどん進んでいる地域ではありますが、広い農家をあまりいじらずに民泊という形で修学旅行の学生や旅行客が泊まれたり、五右衛門風呂があったりということで、農家を、農業や里山を生かしたままで観光と結びつけていくような取り組みになっています。松園先生もご宿泊されたという経験もあるので、後で体験談を踏まえていろいろ議論いただきたいと思います。

これは中心になってやっていらっしゃる多田さんという方ですけれども、おっしゃっていたのは「もうアイデアを出していくしかない」と。何も東京のお客さんだけをねらうのではなく、台湾や中国の人にも来てもらえるようにいろいろ情報発信をしていって、そういったところの団体客を呼び込めるようにしていきたいとおっしゃっていました。

これはちょうちんツアーです。都会から来た方が能登に来て何が一番驚いたというか、新鮮だったかと聞いたら、夜、真っ暗なのがびっくりしたと言っていました。その真っ暗な中をちょうちんで歩くだけのツアーですけれども、その地域、都会では体験できないものの価値を見出して、地域の資源をうまく使ってというような例です。これはきのこ狩りとか、廃校になった小学校を使って体育館では農機具を展示して、老人の方が集まったり、宿泊できるような施設をつくったりということをやっているような能登の取り組みです。

もう1個は和歌山ですが、こうやって和歌山でも梅畑が放棄されたりして、高齢化も進んでいます。ここもやはり小学校を改築して、地元の食材ですとか地元の人が働けるレストラン等、宿泊施設をつくっているような、これも比較的テレビなんかで取り上げられたりして成功している事例です。こういった活動なんかを和歌山の例として紹介されています。

海洋の酸化とかサンゴ礁の保全というのは、後で浪崎さんからご説明があると思いますが、これは沖縄の恩納村漁協の取り組みで、サンゴ礁の再生をスキューバダイビングの人たち、この日は全日空とその関連会社の社員さんが集まって、ダイバーがこういった漁協の協力で大きくなったサンゴ礁を植えつけにいくという活動をしています。これはポイントとしては漁協が比較的、行政からそんなにお金を、あるいはほとんど入れられずに活動しているということと、このダイバーさんたちがお金を払って一応活動しているということが、少し企業がかかわっているというところではポイントなのかなと思います。

僕のように潜れない人は、手作業でこういうのにつけるといって、またこの中に入れて、6カ月ぐらい大きくしてダイバーの人に取りつけてもらう。ちょうど保護するようなシートもかぶせるのですが、そういった活動をボランティアがやるのではなく、お金を払ってでもやりたいという、関連する企業の社員さんとか、あるいは一般の方が入ってやっているというのは少し新しいのではないかと思います。これはサマースクールの写真です。

もう一個は、自然再生とか水のサービスが弱者にも行き渡るようにしましょうというのが愛知目標の中にも入っています。これは九州の水俣です。水俣というのは海のイメージが強いかもしれませんが、8割がこういう森林です。水俣病を和解する方向に導いた市長さんというのが、実は山から来た市長さんだったという経緯もあって、結構山の中はきれいな水があります。これは水俣湾ですけれども、すごく穏やかな海できれいなところです。

これが水俣川で、一時期すごく汚染されていた場所ですが、今はきれいに再生されています。これもチッソですが、ここから60年代、70年代は公害を引き起こした水銀が出ていました。こうい

うモニュメントもあったりして、ある意味では国・県が敗訴したということもあって、かなり行政からお金を入れての形ではありますけれども、再生をしています。もちろん今でも患者さんのお話ですとか、7月末の打ち切りをめぐっていろいろなご議論がございますが、一つ再生中であるということも含めて、自然環境と人間との関係を考える上で重要な地域なのではないかと思います。

ただ、私が言いたいのはチッソが悪いということではなくて、地元の人たちにしてみると安定的に雇用してもらえる先というのはそれだけ重要だということもかなり声としては強くて、もちろんいろいろな歴史的なことですとか、住民の間でもそういった複雑なやりとりがございましたので、あえていろいろ申し上げたくはないですが、今でもこういうことは前面に議論といいますか、看板で出ていたりするんだと思った次第です。

これは三重県の例ですが、『古事記』に、三重にベニバナが咲いていてそれが奈良に献上されたという記録があったそうです。それを見た染織家の人が、ベニバナをつくるのに恐らく伊賀の里というのは向いているはずだから、また復活させてほしいと頼んで、リタイアされた方がボランタリーにNPOという形でベニバナをまた復活させて、これが染織家の吉岡先生ですが、僕もちょっと入れてもらいました。こういうベニバナを復活させて、干して、だんだん酸化してこうやって赤くなってくるんですが、それで紙をこうやって赤くするような、そういったプロジェクトです。

何が言いたいかというと、生物多様性というと生き物の話にどうしても目が行きがちですが、実際にはこういう日本の伝統ですとか文化とかお祭りとか、そういったところで使われている植物や生き物を大事にしたり、復活させたりするということも非常に大事な活動の一つですし、愛知目標にはそういったところも含まれていることを申し上げました。ベニバナというのはとげがあるので大変で、これだけ集めてやっとA4の紙4枚ぐらいが赤くなる程度のものです。ですので当時、赤くなった紙というのは金と同じぐらい価値があったと言われています。

そんなざくっとした私の国際的な生物多様性の流れと、国内でこんな取り組みをこれから広げていく、あるいはやっていくことが大事なのではないかというお話を少しさせていただきました。この後は川廷さんからもお話があると思いますが、生物多様性の10年ということ。そこで企業と市民が地域性を考慮しながらどう連携していくのかがすごく大事になるでしょうし、農林水産業も物をつくるということも大事ですし、それをいろいろな方に体験してもらう。ナシ園とかそういう形でもいいですし、畑を実際に体験してもらってそれを収穫して加工するところを体験してもらうとか、第一次産業だけでなくて、サービス業としても何かの付加価値をつけながら、生態系サービスといいますか生物多様性を保持していくということが大事になってくるのではないかと思います。

2014年は名古屋と岡山でESDの10年ということもございますので、生物多様性のもう一つの面である担い手、どういう人が地域社会や保全、利活用を担っていくのかという問題。人材の面での担い手をどう育成していくのかという問題とあわせて、両軸で議論していくのがとても大事ではないかと思います。

これまでが生物多様性の条約とか国内の取組みの話で、今日は少し、それに加えて皆さんに考えていただきたい問題として、動物をめぐって社会が大きく意見が割れてしまったような例として、一つイギリスのキツネ狩りというものがございます。これはブレア首相の顔をしたポスターですが、いいかげんにもうキツネ狩りというのをやめさせろということを、トニー・ブレアに訴えかけようというはがきです。これはトニー・ブレアに送ろうというキャンペーンの中で使われたものです。

実際、これは僕が勉強していたノリッチという町ですが、普通にフリーマーケットが並んでいる中をふらっと歩いていたら、キツネ狩りをやめさせろという署名を集めているところがあったり結構身近なところでやっていたりしました。

企業やNPOとの関係でいうと、例えば比較的過激だと言われる団体などは動物実験をやめさせようと。こういった動物実験をやっているところはけしからんよというキャンペーンを張って、それが飛び火してこういうところに受託をしてい

る。何か製品をつくるときに動物で実験してねということをお願いしている日本企業はけしからんよねということが、イギリスで2000年、2001年、2002年ぐらいに起きました。

国内でもこういうふうに意見が割れてしまう要素もありますし、国際的にもすごく文化的な摩擦の要因になってくる。あるいはこれなんかは、動物を大事にする企業にだけ投資をするような投資ファンドです。そういったことを宣言しているような企業のみを選んだ投資ファンドですというのを、シティバンクかどこかが組んで売り出していた例です。

これはやはり動物の権利の比較的過激な団体です。動物の毛皮をつけているぐらいだったら裸でいたほうがいいというキャンペーンです。これの注意点というか僕が思うのは、環境の運動というのは70年代や80年代は、女性や労働者の権利とか、環境の権利の団体と比較的仲よくやってきて、お互いが運動をしていく上で協力していくような行き来とか体制というのがありました。しかし、この運動の場合は完全に女性の解放系の概念を捨ててしまって、動物さえ守られればいいというようなコミュニケーションの仕方にしてしまっている。つまり女性の団体からしたら非常に不適切な表現の仕方というのをあえて意図的にとって、注目さえ集められるんだったら、我々の大義とする動物の権利を訴えられるんだったら、こういうものをキャンペーンとして使ってもいいという運動を展開しているというのが少しびっくりしたので入れました。

ビデオを用意しましたので、こちらを残りの時間でごらんいただければと思います。

（ビデオ上映）

いろいろなポイントが出たと思いますが、特に私が申し上げたいポイントは、痛みということを結構強調して言っていたんですね。気づいたかわかりませんが、痛みを伴いながら殺すとか、痛みを与えているのでよくないと。これは非常におもしろい議論があって、欧米というのは痛みを与えることがすごくよくないというスタンスで、いろいろな動物との関係を考えることが多いです。

それに対して、ざっくりとした言い方で申しわけないですがアジア圏、東洋圏というのは、命を奪うということに対する罪悪みたいなものがある。そうするといろいろな難しい議論になってきて、後で東海林先生と議論になると思いますが、実験動物をやったときに、では痛みを感じない生き物でやるのがいいのかとなったときに、痛みを感じない生き物とは何かとか、爬虫類ならいいけど両生類はどうなんだとか――逆か。いろいろなラインとか、痛みということにすごく重きを置くのか、命を奪うということをどう考えるのかとかそのあたり、ちょっと国際的な軸。

あとは当然もう一つのポイントは、動物というものを通して社会、人間というものが争っている。この場合は階級ですね。キツネ狩りを割とやっていた人というのは、裕福な人が多く出てきた。弁護士から転じてそういうコーディネーターになったとか、4歳で手習いを始めてというようなことで、ある種の動物を介して活動ですとか、食べ物でもいいんですけれども、それが社会的な地位とか何かを示すようなシンボルとしてあるわけです。それを持っている裕福な層と、そうではない層の対立にもなっています。

もちろん人間と動物との関係を考える上でも非常に興味深いテーマでもありますが、同時に我々人間社会の関係性を考える上でのちょっとした課題にもなっております。あるいは国とか文化が違うとどういうポイント、論理で自然の保護とか文化とか自然との共生という論理を構築しているのかを考える上でも、キツネ狩りというのは結構おもしろいテーマではないかと思いました。最初のほうの生物多様性の話とは若干距離があるかもしれませんが、その原点にある生き物と人間との関係という題材としてはなかなかおもしろいのではないかと思います。

最後に本当にどうでもいい話をしますが、レミングというネズミみたいなのが、自分たちが爆発的にふえてしまうと、自己犠牲でがけから飛び込んで人口を調整するという説があるのを皆さんご存じですか。僕は『ドラえもん』で読んだ記憶があります。人口がふえすぎてしまうとばばばっと海に飛び込んで、自分たちの集団を守る習性がある動物がいるんだということが、たしかドラえも

んがのび太に説明していたような気がします。

これは1958年にウォルト・ディズニーがドキュメンタリー番組をつくったのですが、実際問題中華料理で使うようなテーブルをぐるぐる回して、ネズミたちを人間が海にほうり込んで、「彼らは自分たちの集団を守るために今、海に飛び込みました」という、完全に人間側がつくった絵だったのです。ある意味やらせだった。それをカナダのテレビ局が、何でそんなやらせ番組がつくられたのかというのを後でやったのですが、そういう意味でも、我々は野生動物や自然と触れ合うとか共生しているというイメージをいろいろ持っていますが、結構その中にもやらせっぽいものやつくられた映像は多いということを最後におまけでお話しさせていただきます。これからいろいろなお話が出ると思いますが、ちょっと私の批判的な映像とか、一部の方には不愉快な映像もあったかもしれませんが、問題提起のような形でお話をさせていただきました。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

関谷直也

香坂先生、どうもありがとうございました。簡単に質問をとりたいと思いますが、いま直接質問をされたいという方、いらっしゃいますでしょうか。もしいらっしゃいましたら香坂先生がちょっと早めにご退室される関係で、今すぐにご質問のほうを事務局のほうにお預けいただければと思います。

ではちょうど50分になりましたので、休憩をとらせていただきたいと思います。3時ちょうどからパネルディスカッションに移らせていただきたいと思いますので、3時にもとの席にお戻りいただければと思います。

(コーヒーブレイク)

関谷直也

では、3時になりましたのでパネルディスカッションに入らせていただきます。

パネルディスカッション「生物多様性にどう取り組むか」。まず、パネラーの中で議論をする前に、それぞれのパネリストの方々から、どういう立場で生物多様性に取り組んでこられているかということをご紹介いただければと思っております。

初めに、博報堂広報室CSRグループ部長の川廷さんよりお話をいただきたいと思います。川廷さんは一般社団法人CEPAジャパンの代表をされており、生物多様性の問題についてNPOという立場からも取り組まれております。もともと博報堂DYホールディングスグループにおいて、生物多様性だけではなく環境問題のことについて取り組まれておりまして、チーム・マイナス6%からずっと環境問題についてコミュニケーションの分野から取り組まれている方でございます。

では川廷さん、よろしくお願いいたします。

川廷昌弘(博報堂広報室CSRグループ部長)

皆さん、こんにちは。今日はよろしくお願いします。香坂先生の話で時々僕の名前が出ていましたが、それにこたえられるかどうか、お話していきたいと思います。

僕は博報堂の社員として、テレビの番組とかコマーシャルをつくっていました。例えば、日曜日の夜の番組「情熱大陸」の立ち上げなどに関わったりしていました。

2005年に、国民運動「チーム・マイナス6%」を博報堂が環境省から受託し、初めて環境の仕事に関わりました。それまでは環境問題について、正直、全くわかっていませんでした。ですから、今からお話しするのは僕が2005年以降学んだことばかりですので、若い人に、こういう話を聞いていただけると非常にありがたいと思っております。

博報堂のCSRグループ部長ですので、広告会社や企業のCSRについてとことん考えなければいけない立場におります。

それから一般社団法人CEPAジャパンについては、後ほど説明します。

それと、日本写真家協会のプロの写真家としても活動していますので、三つの立場で動いていると思っていただければと思います。

写真家の活動について少しお話をしようと思います。もう終わってしまったんですけれど、「人工林の美、林業の現場。」という写真展を三重県立熊野古道センターで7月1日までやっていました。ストレートに第一次産業の現場を写真で表現して、人工林が一体どんな景観なのかを伝えよう

というものです。つまり、環境コミュニケーションを自分の表現手段でやっているもので、これは若き林業家ですが、もちろんポーズをとってもらったわけではなくて、自然に働いている現場で写真を撮っているものです。

写真展の会場は、林業の現場を再現するため、床にチップを敷いて木材を置いて土場を再現し、チェンソーなど道具を置いています。皆さんに森の中の現場というか、林業の働く現場というのを体感していただこうということでつくりました。

オープニングイベントでは、三重県で200年続く林業家、速水林業代表の速水亨さんと対談をしました。今、林業は斜陽産業と言われていますが、本来は主幹産業と考えていかなければいけない。自然資源による商売ですから、山から住宅まで、生物多様性の保全に資するということで、どのように生物多様性という概念をわかりやすく伝えていくか。暮らしの視点から、生物多様性と言う必要もあるし、言わない必要もあると思っているんですけれど、その辺のことを考えながら、みずからの活動でも表現しようと考えています。

一つだけ展示した写真でお話をします。これは熊野古道です。ぱっと見て、石畳があるので、おっ、熊野古道だなとわかるんですけれど、例えば、熊野古道を歩かれる若い女性も多いのですが、「熊野古道に行って、私、すごく癒されてきたよ」と、みんな話をされるんですね。とっても緑がきれいだった、石畳で歴史を感じたと。

でも、この見えている緑というのはヒノキの人工林です。つまり、その現在に生きる女性は、100年、200年前の林業家のわざによって癒されたという、時空を超えた生態系サービスを体感しているということですよね。

僕も、山に入って初めてそれがわかりました。言葉で理解しました。つまり、「熊野古道だから美しいだけでなく、人工林を抜けるから美しい。」とも言える。これが地場産業として地域経済を回していると考えれば、とても豊かなことではないかと考えたい。

このように物事を伝えることが環境コミュニケーションであり、生物多様性の理解になると考えて、生業としてやっている人間ですという自己紹介にもなるかなと思っています。

生物多様性という言葉を表現するのに、慶應大学の岸由二教授がつくった言葉ですけれど、「大地と海と空に生きもの賑わう地球」。生きものの賑わい、もちろん、これは我々人間も入った話ですね。我々も微生物が体の中にいて動いているわけですから、難しい話になってしまいますけれど、この地球上の循環の中に、人間は一つのサイクルとして存在しているという考え方ですよね。

そういう意味でも生物多様性というのは、そういった生き物の交流とか、そういうものがいなければ人間を含む生き物は生きていけないわけで、つまり、生物多様性はコミュニケーションの世界なんだと理解しています。

名古屋で2010年にCOP10があり、「愛知ターゲット」が決まりました。このゴールは、地球上に住む人が生物多様性を理解して、保全のために行動するということですが、それを世界でどう共有するかという問題があります。国や地域によって文化も違いますし、生き方も違いますから、生物多様性に対する考え方もみんな違うと思います。それを共通言語にするというのはなかなか難しい。我々日本人の場合は、生活文化の中で生物多様性を考えていくべきだと考えています。

「国連生物多様性の10年」が決まっていますが、詳しくは後ほど説明しますが、これからの10年というのは、生物多様性という、コミュニケーションの世界を話すことでもあるし、生物多様性を理解するためのコミュニケーションでもあるということで、交流とか、対話とか、共生とか、そういったことがすごく大事なことだと考えております。

では、まず「生物多様性」とはどういう概念なのかを考えたいと思います。これは「生物多様性基本法」の前文です。読んだことのある方、いらっしゃいますか。私もこういう仕事をしているから読んでいるわけで、読む機会はなかなかないと思います。法律自体、読まないですよね。前文の一文だけ抜き取りました。「人類は生物の多様性のもたらす恵沢を享受することにより生存しており、生物多様性は人類存続の基盤となっている。」と言っています。

もっと言うと、「また生物の多様性は、地域に

おける固有の財産として地域独自の文化の多様性も支えている。」。これが法律の前文なんですね。国が出している言葉です。ここにこれだけのことが書いてあるので、生物多様性は希少生物の保全や、生態系だけの話ではないと、わかっていただけると思います。

つまり、我々の暮らしそのものの彩りを添えてくれているのは、生物多様性という概念であって、それぞれの地域独自の文化もつくってくれている。お祭りとか、生き方とか、しきたりとか、そういうことも含めて、自然の恵みによって私たちは生きている。衣食住そのものでもあります。生物多様性に我々の暮らしは影響を受けているということが、ここに書いてあるのです。

そう考えると、生物多様性は社会、経済、文化の基盤であって、日本の国土の7割は森であり、海に囲まれた世界でもとても貴重な国土ですが、生物多様性は、そこに暮らす我々日本人の精神の基盤でもあるのではないか。

つまり、生物多様性という言葉は、我々日本人はわかっている話を言っているのだと、理解したほうが早いと思っています。生物多様性というと、漢字5文字で表現されて難しいとか考えるのではなくて、我々はわかっていますという事で大丈夫です。

ただ、生物多様性という概念の説明はグローバルで共有されなければならないので、各国でどういう説明をしているのか確認する必要があります。でも我々日本人は、生物多様性を理解した暮らしを営んできている、そういう自負があってもいいのではないかと思っています。

2010年にCOP10がありましたが、そのときに博報堂の仕事として、COP10のオープニング映像をつくりました。ここでその3分間の映像を、皆さんに見ていただきます。

（映像開始）

開会式のオープニング映像として制作したのですが、会期中、ずっと国際会議場で流れていました。まず世界じゅうの自然の風景を出しています。命の源、水の風景。その上にジグソーパズルで生態系を表現しています。それがポロポロと落ちる、つまり生態系の崩壊をイメージしています。さあ、どうしよう？

日本の伝承風景です。縁側でおばあちゃんから、孫娘が、伝承の象徴として、折り紙を教えてもらって折っている。映像には三重県桑名の人間国宝の連鶴を使っていますが、こうして知恵を代々伝承されてきました。鶴を折るというのは願いを織り込む事、命から学んだことです。

ちいさなミツバチの活動も、我々の生活を支えてくれています。

世界じゅうの子供たちの手の上に地球の未来があるという映像です。これを見て、世界じゅうの政府団の人に、改めて危機意識を持ってもらおうという狙いです。

次は森です。森の中ではいろんな生き物がはぐくまれますし、我々の暮らしの道具というのも生まれています。命の源というイメージでつくっています。千代紙も森の木から育まれたもの。世界じゅうの生き物のイメージをここに入れて共有を狙っています。

生物多様性の会議の開催地の地名を入れて。そして愛知、象徴的にドーンと日本の里山の風景。さあ、決めてくれ。Make a decision。

肌の違う、子供たちが折り紙を折っています。千羽鶴のイメージです。みんなで折った折り紙をジクソーパズルにはめていく。つまり生態系の修復、願いや祈りを折り込むことで修復していきましょう。さあ、行動しよう！

命に感謝し、命の営みをもう一度考えよう。条約事務局長、COP9の議長国ドイツの環境大臣、日本の環境大臣。世界じゅうの人に折ってもらいました。

こうして地球市民として、生物多様性の保全をしていきましょうという映像です。

（映像終了）

これは、世界じゅうから来る政府団の人たちが見るということを前提に日本政府の映像として制作したもので、日本の文化の中には、生物多様性という概念は既にある。世界がやるべきことを、私たちは生活文化で理解して民族です。ウエルカム・ジャパン。しっかり議論して決議しようというメッセージを託したわけです。

その中で決議された一つが「愛知ターゲット」。

先ほど香坂先生の話にもありましたように、20個の目標が2020年までに立てられているわけです。あらゆる生物多様性に関する目標が立てられていて、私たちは既に取り組んでいなければいけない。残り8年になってしまっています。大変です。

「気がついたら2020年」、それだけはやめようということで、日本の市民として「愛知ターゲット」を、地球を守る最後の約束にしようと日本の政府に提案したのが、この「国連生物多様性の10年」。つまり、「気がついたら2020年」だけはやめ、この10年をどう営んでいくかということを一緒に考えていきましょう。それは、国だとか、市民だとか、企業だとか関係なく、すべてが役割分担なんだから、それを考えていきましょうということで国連に採決してもらった取り組みですが、2年たってしまっているので、残り8年。

では、「国連生物多様性の10年」をどのように考えるか。去年2011年は国際森林年でした。森から命の物語を考えるというのは、とてもいいスタートでしたね。水源涵養とか、すべての流域を潤すとか、森の本来の機能を考える。私たちの暮らしを支える森を知る。

今年は、先ほどもお話があったように地球サミット。リオ＋20。明快な決議は出ていない状態ですけれども、今後、グリーンエコノミーとかUNEP（国連環境計画）のあり方をどう考えるか。すごろくの振り出しに立って、これから議論をしていく。それがあった。

来年は、本来は気候変動枠組条約の第2約束期間に入るはずですが、約束がまだできていません。次の第2約束期間は2015年になる見込み。「京都議定書」を延長するか否かという議論をやっていますが、日本は離脱。それは消極的な話ではなくて、アメリカや中国も巻き込んだ積極的なものにしなければいけないからこそ新たな枠組みが必要であると日本は言っています。

2014年は、先ほども言いましたけれどESD（Education for Sustainable Development）、持続可能な開発のための教育の10年の最終年。これも日本政府の提案ですが、ESDをご存じの方、いらっしゃいますか。――はい、ありがとうございます。開発という言葉は、デベロップメントという言葉は難しいですけれども、開発というものが、自分たちの生活に将来どのような悪い影響があるかの判断ができないでいた。

例えば、生活がよくなると思って近代的な施設、例えばダムを誘致したら、水の流れが変わって、川で漁をしていた先住民が漁ができなくなっちゃって、暮らしが立てられなくなってしまった。それに対して地域住民や先住民が、自分たちで暮らしを守るための意思表示ができるようにする。日本の地方でもそうですね。地球の資源を理解して地域を守る人たちを育てよう。本当の意味でいい開発ができる、地域づくりする人たちを育てようという教育の10年が終わってしまう。この年、先ほども香坂さんからお話がありましたように、岡山と名古屋で国際会議が行われます。

それから、2015年はミレニアム開発目標の最終年。MDGs（Millennium Development Goals）といって、貧困撲滅。貧困を半減しようということで取り組まれてきたものが、15年やってきたものが終わってしまいます。貧困は半減できていません。ですから達成目標はできないと言われているわけですが、これの継続した取り組みとしてSDGs（Sustainable Development Goals）というのがリオで議論されて、多分、これが2015年から新たな枠組みとして取り組みが始まります。そういったことで、実は「国連生物多様性の10年」を国連は定めたものの、既にいろんな取り組みがある。地球を守るということは大変。

さらに日本は、言わずもがな、東日本大震災からの復興に邁進しなければならない。先進国としてODAでお金を出さなければいけない、自分たちの国も守らなければいけない。これだけのテーマを、途上国、先進国の間で、日本はどうイニシアティブをとっていくのかですが、冷静に考えると、目指す姿は一つだけです。それが、自然の恵みに支えられた持続可能な地域づくり。何だかんだと言ったところで、私たちは生きているものを殺してしか生きていけないわけで、衣食住というものをもう一回考えましょう。それがいろんな外の国々に頼ってきていいんでしょうかという話をしなければいけないのも生物多様性で、生物多様

性のテーマというのはとてつもなく大きい。

つまり、こういったさまざまな課題を全部共同しながら、連鎖、つながりながら考えていくことが生物多様性という概念であると考えなければならないのではないかと思うわけです。

このような話を学び共有することが生物多様性条約の中に第十三条で締約国の義務と定めてありますが、お手もとの資料は、クイズのように赤い文字が消えてしまっていて、画面を見ていただかないと読めない状態にあります。要するに強調したいところが消えてしまっています。

「さまざまな伝達手段による普及啓発」「教育事業に取り入れる」「必要に応じて他国や国際機関と連携する」という三つのポイントが、教育コミュニケーションにおいて重要であるということが条約の条文の中に書かれています。COP10ではその決議がありました。

先ほどCEPAジャパンという団体を代表していますと言いましたが、CEPAというキーワードがあります。これは先ほどの第13条のキーワードで、Communication、Education、Public Awareness。環境省は、広報、教育、普及啓発と訳していますが、Communicationはコミュニケーションのままで、今の日本ではいいかなと思います。

CEPAにはいろんなキーワードがあります。これはCEPAのツールキットから引っ張ってきたキーワードです。広げる普及啓発（Public Awareness）、それから知識を深めるEducation（教育）、そして、さまざまな手法によるCommunication。Connecting、つなぐ、つながる、連鎖する、つながっていく。これ、とても大事なキーワードです。それからCapacity Buildingとか、Empowermentとか、やはり地域の力をつけていこう、知識をつけていこうというキーワードもこのCEPAの中に入っています。それを考えると、このCEPAというキーワードは生きる知識をつけ知恵を絞るためのもので、とても深いものがあるということが、改めてよくわかってきました。これは清里ミーティングという、環境教育の人たちのフォーラムが毎年秋に行われるんですけれど、そこで、皆さんと議論をしてつくった図です。

私がこういう話をしているのも、実は、COP10の本会議でNGOとして提言をしました。本来は政府団の発言の場ですけれども、オブザーバーとしてNGOも発言するチャンスがあるということがわかりました。CEPAの決議があり、決議文としてはとても足りないものだったので、これはまずいと思って、発言できるかどうかはまったくわかりませんでしたが、準備をしました。私は英語がしゃべれないので、2カ月英会話へ通って、日本文でつくった決議文を先生に英訳していただいて、その音読を最初は5分以上かかったんですけれど、2カ月の特訓で何とか3分ぐらいまで短縮できて、ただ、暗唱はできなかったので、手もとを見ながらでしたが何とか通じたようです。

ベルギーとかカナダとか、教育とコミュニケーションに熱心な国があると条約事務局に交渉に行った際に教えてもらい、その政府団の人ともむちゃくちゃな英語でコミュニケーションしたら、想いが強いからか伝わったようで、「大丈夫、同じような事を考えているから発言して。」と言われサポートもしてもらった経緯もありました。つまりロビー活動もしてきたということです。

そういう形で、決議が修正されて、僕らが言いたかったことも決議文に入って、COP10で決議された。でも決議はただの紙切れですので、ほうっておいたら、だれも知らない話なんですね。だから、こういうことが決まったんだということをこうやって伝えることが、自慢話ではなくてアピールすること、そういうことも活動なんだなというのも、あるNPOの人から教えてもらって、改めて理解しています。

この活動に基づいて、CEPAジャパンというのをつくりました。これは環境省とか経団連自然保護協議会の皆さんとも共有しています。すべてのセクターが力を合わせて、それぞれの役割分担、大きな影響がある企業も取り組んでいくために動いています。

国際条約ですので、事務局ともMOU（覚え書）を交わして、国内で生物多様性のコミュニケーションをやることを国際条約の事務局も応援してくれる。かつ、日本のこういった自然共生観という生活文化を、ほかの国々にも利用してもらう、

活用してもらうために事例を見せていくことも大事で、そういうこともサポートしていただこうということで、この覚え書きを交わしました。

その中で東日本大震災の復興は、開発ありきではなくて、東北は日本のふるさとであり、日本の自然資源のふるさとでもあるということで考えると、今の東北の姿が変わってしまったのでは、日本のすべての生活基盤も変わってしまうと思うぐらいの話ですので、生物多様性を考えたグリーン復興が大事。これは東北大学が進めているプロジェクトですが、環境省も一緒に取り組んでいこうということで、環境省のプロジェクトの中にも「グリーン復興」というキーワードが入り、取り組みが始まっています。

その中でも、先ほどの香坂先生の著作にもありますけれど、RESILIENCE、RESILIENT という言葉はとても大切で、これをあえて訳すと「自然治癒力」ということではないかと思います。つまり自然というものは、自分が治癒していく力を持っているわけです。人間の体もそうですよね、自然治癒力というのがある。それを超えるような開発はやめよう。ストレートに言えば、原子力は考え直そうという話です。

要するに、人間の力が及ばない、自然の力が及ばないような、そういった技術によって何か自分たちの経済を支える、暮らしを支えることは本当に正しいんでしょうかということを考えていこうということを、この RESILIENCE というキーワードで考えたいと思うわけです。

もう一つ、これは日本政府というか環境省の取り組みですけれど、先ほどの 10 年の取り組みを推進するための、「国連生物多様性の 10 年日本委員会」というのがあります。僕は NGO の立場で、その日本委員会の委員にもなっているんですが、企画業務というのが公示され、企画も取り組もうと考えました。つまり、生物多様性の取り組みがこれ以上遅れてしまってはティッピングポイント、もうこれ以上ほうっておいたらやばいよという状態を過ぎているかもしれないと言われている今ですから、本当に多くの気づきをいろんな方々にしていただくための取り組みが必要だと思って、NGO のコンソーシアムを組んで獲得し、取り組みを進めています。

先ほども言いましたように、僕は地球温暖化の国民運動に携わりました。チーム・マイナス 6%。これは、そのときにつくった広告です。当たり前のことが書いてありますが、こういうことですよね。「オリンピックは地球以外では開催できない。」要するに、温暖化が進んでしまうと、テニスではコートの向こうの敵だけではなく、空にも敵がいる。熱射病で倒れてしまう。

水がない。飲み水がないのに泳ぐ水がありますか。オーストラリアで世界水泳がありました。そのときオーストラリアは大干ばつでした。オーストラリア政府は、プールで使った水を散水で使うなど再利用するとか、そういう対応をしない限り世界水泳の開催に疑問符が突きつけられることもありました。雪がなければ消えてしまうスポーツもあります。ある年、ヨーロッパのスキーの大会は年間 20 大会中止になっている年もあった。これでは競技が成立できないわけですね。

だから、アスリートたちは真剣、深刻なんです。よって、彼らのメッセージというのは、アスリートを目指す次の世代にとっては、すべて自分事として入ってくる。そういう効果を使おうということで考えました。

要するに、地味な僕がこういうところでしゃべらせていただいているよりも、アスリートたちが言ってくれる効果というのは極めて大きいわけです。国民運動のつくり方の一つの方法ということで、提示しました。

チーム・マイナス 6%では、こういった 6 つのアクションを提示しています。クールビズというのは、ネクタイを外したファッションから提案したわけですね。このネクタイを外すと体感温度が 2 度違うという数字を根拠に、「ネクタイを外して空調の温度設定を 2 度上げましょう」と言えたのです。ネクタイをはずというのは、サラリーマンの願望でした。外すことによって、温度設定を 2 度上げる。大事にしたのは、このクールビズのように、そのターゲットを明確化して、価値転換となる日常の行動欲求、共感ポイントをちゃんとつくりましょう。サラリーマンにとっては夏のネクタイが嫌だ。主婦にとってお買い物の時の経済

的なメリット。レジ袋を断ればお金が返ってくる、ポイントがたまるとか。このようにターゲット別に何らかの共感ポイントというのはあるわけで、楽で、格好いい、快適、健康、お得、便利。これを目的にしているわけではなく、こういった共感ポイントを使うことで、環境に優しいから何かするのではなくて、楽で格好いいから何かしたら環境には優しかったという結果を出せるように。

生物多様性を守るために活動しましょうと言っても、なかなか難しいですよね。ですから共感ポイントで行動を促して、結果、自然資源の保全になった、私たちの暮らしから実感できたというふうなコミュニケーションをやりたい。

さて、環境省が生物多様性の宣言のためにつくった、MY行動宣言というものがあります。

しかし、具体的なアクションの提示がなかなか伝わっていなかったので、今回あらためて提案をしました。

生物多様性を守るために私たちができる5つのアクション。前文です。国際条約のように世界の人々が協力することも大事ですが、私たち一人一人にできることもたくさんあります。まずは、暮らしの中で生き物とのつながりを感じることが大切ですね。なぜなら、水や空気はもちろん、食べ物や着る物の材料、木材、薬の材料など、いろいろな生き物のおかげで私たちは生きているから。衣食住の当たり前のことが子供にもわかるように書いてあります。

これは、もともと環境省のツールの中にあったものから引用しています。せっかくいい文章があるんだから、このまま使いましょうと。

では、具体的に何をするかということで、これはこちらからアクションを提示。1つ目は、季節ごとに、地元でとれたもの、旬（しゅん）な食材を食べます。2つ目は、自然体験や動物園、植物園に行ったら生き物に触れてみます。3つ目は、自然のすばらしさや季節の移り変わりを写真や絵や文章などで伝えます。4つ目は、地域や全国の活動に参加して、生き物や人、自然とのつながりを守ります。最後の5つ目は、エコマークなどがついた環境に優しい商品を選んで買います。

「食べます」「触れます」「伝えます」「守ります」「買います」、このキーワードは環境省のツールの中にありましたが、うまく整理されていなかったので、以前からCEPAジャパンで使っていた、「生物多様性を守るために私たちにできること5ACTONS」を統合するように提案しました。これを生かしましょうと。「触れよう」「伝えよう」「守ろう」。これまではこれだけで、生物多様性の活動を環境省は仕掛けていましたので、それでは足りないと。

いわゆる暮らしの視点、私たちの暮らしからの視点がなければ、自然の側から何かを言われてもなかなか自分の事として理解するのは難しい。それは自然の好きな人のやっていることだよねとなってしまうので、主婦や子供にアピールするには、やはり食べることとか、お買い物のことも入れたら少し気づきの機会が増えるのではないかと。この五つのアクションを新しいMY行動宣言にできないかなということで、提案をしましたが、いかがでしょう。

多くの人と共有できるものをつくるというのはなかなか難しいですが、まずはちょっとこのあたりから始めてみようかと思っています。これはいいんじゃないかという方は、拍手をいただけるとありがたいです。（会場から拍手）

すみません、強要したようで。しかし、このようにつくっていくんだというプロセスもわかっていただけるといいかなと。

さて、このツールを活用した結果、つまり、生物多様性の保全に資する活動、暮らしの視点でできる活動って何だろう。ああ、こういうことで良いんだなと感じていただき、まだ生物多様性という言葉の理解もない一般の方々にも、ちょっとでも近づいてもらおう。

それに気づいてもらえたら、今度は、条約の取り決めである「愛知ターゲット」に近づいてもらわなければいけない。

IUCN（国際自然保護連合）日本委員会が「にじゅうまるプロジェクト」というのをつくっています。「守られているから、守りたい。この星すべての生命。」ということでキーワードもできています。目標である20年に丸をつけよう。20個のすべての目標に丸をつけよう。現場で汗をかい

ている人々たちに、丸ではなくて二重丸をあげようという意味で名付けられたプロジェクトです。日本らしい、子供でもわかるネーミング。ロゴやコピーは博報堂がクリエイティブ・ボランティアとしてお手伝いしましたが、これは愛知ターゲットを知ろう、愛知ターゲットについて、何が自分でできるか考えようというプロジェクトです。

そして、対応する目標を自分がやっているよということを宣言する、「愛知ターゲット」の達成に向けた活動を数で見せていくという事も狙いです。これはもうすでに環境省には提案済みで、環境省も、日本委員会の中で国民運動の枠組みとしてこれを使おうということになっています。多分、ほとんどご存じないですよね。知っている方がいらっしゃったら、手を挙げてください。――ありがとうございます。いらっしゃった。これから頑張って広めたいと思いますので、皆さん、今日は、ぜひ覚えて帰っていただけるとありがたいです。

仕組みとしては、さっきのMY行動宣言5つのアクションというツールと、このにじゅうまるプロジェクトを組み合わせて、日常の行動から愛知ターゲット、いわゆる国際条約の決議につなげていこうというものです。

つまり、一つ一つのアクションから、生物多様性に自分たちの暮らしの視点で気づき、それをにじゅうまるプロジェクトによって国際条約に近づいていこうというイメージです。

国民運動の仕組みですが、この辺は駆け足で行きます。にじゅうまるプロジェクトは民間でつくった仕組みです。それを環境省にも応援してもらいますが、やはり自分たちで、政府や企業に働きかけ、市民にも呼びかけ、トップとボトムの両方に呼びかけ、市民には、MY行動宣言で、暮らしの視点で理解して宣言をしてもらい、少しでも生物多様性に資する活動にも目を向けてもらえるようにして参加をしてもらう。

メディアには、記者クラブのリリースだけで対応してもらうのではなくて、市民活動の側にも目を配ってもらって、各地の地道な活動の報道する機会を増やしてもらいたい。メディアの理解と協力が一番大事で、「こういった取り組みが進んでいます。これが生物多様性の保全につながるんですね」と一言を言ってくれれば、「何だ、地域づくりは生物多様性も守れるんだ」という話になって、活動が繋がり合うようになると思います。

そしてさらに大事なのは、そんな活動を企業もしっかり応援していこうという機運になっていく。企業が応援というよりも、企業みずからも行動していこうということになっていくのを期待しているのですが、市民からのボトムアップによるトップダウン誘発という国民運動の姿ができないかなということを、考えながら動いています。

「いただきますの日」というものを、去年の11月11日から始めました。何で11月11日か。絵で見ていただいてもわかるように、お箸がたくさん並ぶ日です。たまたまそういうふうに考えた仲間がいて、一緒にやりましょうと始めたものです。

もっと言うと、2011年11月11日なので、これ以上お箸が並ぶ日は当面こないから、この年、この日に始めましょうとかなり強引な作業でしたが動きました。3.11、9.11、半年に一度、11日に命の尊さを考える日が来る。それなら毎月11日は命の尊さや、命への感謝を考える日にしたい。「いただきます」は1日に何度も言う言葉ですから、本当は毎日考えるべきことですが、でも、節目節目に「いただきます」の本来の意味を考える日があってもいいんじゃないかというように考えました。

食卓にあがる、いただく「いのち」。それをはぐくむ「自然」、水や光や風。おいしいものをはぐくみ、収穫する「労働」。それから、収穫したものを運んだり、料理したりする「知恵」。それから、一緒に食卓を囲んでご飯を食べる人。そういったさまざまなことに感謝をする「いただきます」という言葉がある。

ほかにもいろんな意味があるかもしれませんが、ほかの言語では、なかなかこのように命に感謝するという言葉はない。しかし、日本にはこのような自然共生文化による知恵から生まれた言葉が暮らしの中に染みついている。暮らしの視点、衣食住から語る生物多様性。つまり、これが生物多様性の一つのキーワードですということも言えるということで、活動をしています。

去年の11月には丸の内でトークイベントなど

を開催したのですが、毎月11日にはできるだけ「いただきます」を感じるいろんなイベントをやろうと、ちょっと地味なんですが、活動を続けています。素敵なホームページもありますので、「いただきますの日」で検索すると出てきます。素敵な仲間たちがほぼボランティアでつくっているものです。何とか企業協賛をいただきたいと思っています。

最後に。森についてお話します。今日は、都会の町並みがこんなに眼下に広がる会場で生物多様性を考えるという試みですが、私たち日本人は、この眺めからも実感できるようにほぼ8割が都市生活者です。しかし今は地方に行ってもそんな問題を抱えています。例えば釧路市に住んでいる人も、海外のゲストが来たときに初めて釧路湿原に入ったという話を聞いて仰天したんですが、「じゃ、あなたは、高尾山に登ったことありますか？」と言われて、そういえば麓までは行ったけど登っていない事に気づき、そうか同じ事なのかも知れない、そういう事なんだと。

つまり都市生活というものは、近くに自然があっても、日常の暮らしの中で踏み込むことは本当に少ない。だから都市に住んで、森に対する感謝ということは日常なかなか感じることができない。でも、第一次産業がほぼ9割であった江戸時代は、建物も木材で出来ていて、自然共生感を持って暮らしていただろうけど、現代ではなかなか難しいので、「都市に暮らしながら森に思いを馳せる」ということを伝えるために、たとえばFSC森林認証制度の製品を導入したり購入したりする事で、世界の森を守る活動に参加する事になりますと伝えています。

一つ、活動をご紹介します。これは北欧から始まった活動ですけれど、LEAFという環境教育プログラムがあります。世界の14カ国で行われていて、日本でも取り入れられています。このプログラムのユニークなところは、子供たちが森林を経済で学べるのです。林業というものは、地域経済循環のもとになっているということを学ぶ活動です。これを国内に持ち込んだのは日本の林業家です。要するに、自分たちの産業を環境教育で教えられるんだ、これはすごくいい、ということで始めたものです。

もう一つ、その林業家が言っていたのは、三角関数を子供と一緒に、森の中で考えることができたんですよと。サイン、コサイン、タンジェントなんて、教室で暗記するものだと思っていたら、何と生活に必要なものなんだということを、子供たちに森の中で教えて初めて自分は気づいた。つまり、木の高さをはかるのに使うのです。そうか、数学は暮らしで使うから学ぶんだ。受験勉強のために暗記するんじゃないということを、改めてそのときに実感したということを聞いて、生きるための環境教育なんだと思いました。

こういうことが本来の教育であって、机上で、暗記で覚えるんじゃないということを、これからの子供たちに伝えることは重要ではないか。つまり、現代の大人たち、教える側にも楽しみながら教えることを考えてもらって、子供たちに生きる知恵として伝えることが重要だと。その伝え方も大人の責任だと感じるのです。

さて、いろいろお話してきましたが、大切なのは暮らしと国際条約をつないでいくことで、ゴールは当然、みんなの行動を変えることです。

各地の郷土愛による活動が生物多様性を守っていて、実はそれが国際条約で言われている事でもあり、暮らしと国際条約はつながっているんだということを、我々伝える側が理解しなければならないと思っています。生物多様性を暮らしで実感できるように、私たちの世代が伝承者となって未来を支えていきましょう。今、こういう考えが生物多様性のコミュニケーションで重要なことではないかと思って活動をしています。ありがとうございました。（拍手）

関谷

川廷さん、ありがとうございました。

では、続きまして岸和幸さんにお願いしたいと思います。岸さんは、リコーの社会環境本部でシニアスペシャリストを務められた後、持続可能な社会を生み出すための組織としてつくられて、Co-Creation Harmonyを代表を務められております。たしか私が記憶している中では、生物多様性ということを前面に出して企業が活動を始めたのは、リコーが初めてだったのではないかと。で

すので、この分野では一番早くから取り組まれてきた方だと思います。では、岸さん、よろしくお願いいたします。

岸　和幸（Co-Creation Harmony 代表）

皆さん、初めまして。岸和幸と申します。よろしくお願いいたします。今、川廷さんのお話に聞きほれておりました。

企業の中で生物多様性というのは現実的にはなかなか理解されていない状況ですが、今の川廷さんのような話を、いろんな企業が勉強会で、ゲストや講師にお迎えして話を聞くと、「生物多様性って、そもそも何」というところから、経済活動とどうつながってくるのかというところ、そういったイロハから始まって、実際の現場とどうつながっていくかということが非常にわかるのではないかなと思って、感心して聞いておりました。

私は昨年の12月まで株式会社リコーで働いておりました。これは私の自己紹介でタイムラインですけれども、1965年に生まれまして、2001年からリコーで生物多様性を専任で担当していました。以来10年ほど行った後に、今年から「Co-Creation Harmony」という活動を始めました。生物多様性を含めて、持続可能な社会をどう構築していくかということを企業1社や個人一人一人ではなく、社会に存在するものどうしとして共創する。そのためのプラットフォームとして活動を行っています。

持続可能性というのは、頭の中でわかるようでわかりづらい、非常に難しい問題ですね。持続可能が必要ということは、今の社会はそうではないということです。となると、どうやって持続可能にしていくか。これは非常に難しいのですが、お一人お一人、皆さんのいろんな専門分野、強み、アイデアなどを出し合いながら、創り上げていくかということで共同創造、「共創」と言っていますが、これが必要ではないかと思います。

このタイムラインで、私の自己紹介の欄の隣、緑（文字）が、日本で当時、どのような事件や環境の問題が起きたかを挙げております。その横に赤文字で世界の人口問題を上げています。香坂先生がサミットの話をされていましたが、驚くべきすごいことが世界で起きているのを実感します。

例えば私が生まれた9年後、世界人口は40億人でした。それが、昨年世界人口は70億人を超えたんです。これは大変なことです。30億人も世界で増えたという現実。世界で多くの方たちが毎日毎日をそれぞれに生きている。この間に亡くなっている方たちもいますが、世界の70億人が毎日の生活の中でいろんなものを食べて、空気を吸って、いろんな廃棄物を出してという生活をして、世界中にあるたくさんの資源、エネルギーを使っているわけです。

以前、リコーで、このままの勢いで人口が増えて、資源、エネルギーを消費した場合に地球はどうなっていくのかという「2050年のシミュレーション」をしたことがあります。それによると、2050年には、地球が3個ないと人類は世界の中で生きていくことができないという予測が出されました。

リコーはコピー機をつくっている会社ですけれども、さすがに地球をコピーまではできないですね。紙の図面等はコピーできますけれど、地球はコピーできない。それではどうしていこうと。会社としてどう取り組むかを考えたのが、環境の負荷を下げること、それと生物多様性の保全を行って地球環境をプラスにすることもできるのではないか、そんなことをいろいろ議論して活動してきました。そのあたりを少し、お話しさせていただこうと思います。

企業の中では、利益をどう上げるかということが重要です。経済活動のセクターとして、今現在は利益に直接結びつかない生物多様性活動を2001年当時に企業の中で進めるのは非常に大変なことでした。今も大変だと思います。

2008年いろんな業種から14の企業が集まり「JBIB」（企業と生物多様性イニシアティブ）という組織が立ち上がりました。そこでは担当者同士が共通の悩みを、一緒に知恵やアイデアを出し合い、自分たちの社内に対してどうやって生物多様性を理解してもらおうかという作戦会議みたいな場を開いていました。

自分が担当になると生物多様性を勉強しないと仕事にならないので、担当者たちはいろいろ学ぶのですが、この世界は知れば知るほどすごく大事

だとわかるのですね。最近は自然資本という言葉がありますが、生き物たちのいろんなつながりが人間社会を支えていて、その上で経済活動ができていることがわかる。しかし、自分はわかっても、なかなか上司にはうまく説明できない。それが自分の企業の活動とどうつながっているのか？利益にどうつながるのか？と問われると、なかなか難しい。

JBIBは発足時、R&Dとコミュニケーションの二つ部会がありました。当初、私はR&D部会の部会長をやれと言われたものですから、参加している企業人の方たちの話を聞きましたら、自分の企業と生物多様性がどう関係しているのかよくわからないという悩みが共有してありましたので、まずは、生物多様性と自社とのつながりを示す「関係性マップ」というものをつくってみましょうということになり、皆さんとチャレンジしました。

これが「関係性マップ」と呼ばれるものですが、例えばリコーの場合、コピー機を中心に置いた絵です。ものづくりメーカーであれば皆さん一緒だと思うんですけれども、ライフサイクルの初めは原材料の調達ですね。ここでは、例えば再生不能な原油やウランとか、あるいは様々な鉄鉱石、再生可能資源である木材や水などを使っています。これらの原材料を調達して、その後に設計・製造、とりわけ工場現場においていろんな化学物質を、大気や水、あるいは土壌に排出します。そして、輸送や販売、保守、改修、リサイクルというプロセスで、さまざまな化学物質を出しています。

資源の供給にしても、廃棄物の処理にしても、自然界が仕組みの中できちんと処理をしてくれていることが良く分かります。

味の素さんも参加していますが、真ん中に「ほんだし」を置くと、水産資源のマグロが持続可能に調達できないと、製品をつくれないね、みたいな話になります。この関係性マップを企業の内部で生物多様性を取り組むための入り口のツールとして、各社でつくることを行いました。

この様な活動を通して、あらためて大事と思うことは、無尽蔵ではない有限な資源やエネルギーを使いながら、企業がどうやって持続的に経済活動を行っていくのか。国際的にも重要問題なのですが、企業としては何ができるのか？頭で理解することが大切ですが、単に頭だけではなくて、やはり腹まで落とし込まれないと実際の活動にはなかなかつながらないということが私の実感です。

私が2001年に生物多様性に取り組むようになった当時、リコーは1998年に環境経営をを掲げて、当時社長で現在会長の桜井正光さんが、「地球環境、待ったなし」と言われていました。地球環境、待ったなしという状況で、企業として持続的な経営をどう行っていくかということが重要であると考えられていたのですね。

経済がどんどん肥大化する中で地球環境に対して大きなストレス、ダメージを与えている。一方で、人間社会の中でも、文化に対してマイナスのダメージを与えている。今のままでは人間社会はとても持続できなくなる。経済活動を持続的に行うためには、当然、人間社会が安定している（ことが必要です）。人間社会が安定するためには地球環境の生態系も安定していないと経営は成り立たない。

では、企業であるリコーはどんなことを行うかという中で、一つは、このバランスシートの絵にある左側の「環境負荷を削減する」ということ、これを3本柱と呼んで、「省エネ・温暖化防止」「省資源・リサイクル」「汚染予防」。汚染予防は化学物質の管理です。これらの活動が、環境に対してどのくらい負荷を出しているのかを環境影響評価により数字評価しました。それを基にして目標数値を立てて、3年単位の計画で目標数値に向けて削減行動を行う。そして、コミュニケーション活動として、毎年これを報告書に掲載するということを行ってきました。

リコーでは、負荷の削減に加えて、地球環境に対してプラスのこともできるのではないかと考えました。それで生物多様性の保全を行うということになったのです。けれども、これは言うは易しで、具体的に何をやればいいのかとなると難しい。それを考えろと私は言われたのですが、非常に苦労しました。

あちこちの本屋さんに行っては、地球環境問題のいろんな本を探すのですが、生物多様性のペー

ジを開くと、中に書かれているのは「生物種の絶滅」。生物種の絶滅は、経済、企業活動の中にリンクしてこないのです。

リコーはコピー機の会社で、紙をたくさんお客さんが使われます。紙の原料であるパルプは木材チップであり、それは森林から由来しているということから、森林保全に取り組むことになりました。地球環境として森林は非常に大事という大義がありますが、社内のだれでも納得できるように論理化しました。リコーは紙をたくさん使うという性質を持つコピー機を大量に製造販売している会社。地球上で森林は減っているので、これを保全するプロジェクトを行いましょうということを提案し、認められて、「森林生態系保全プロジェクト」が行われています。

また、生物多様性保全の方針を立てて、経営者や、いろんな社員の了解を得られる様に社内環境の整備を行いました。

森林生態系保全プロジェクトをNGOと協力して行い、その実活動を報告書に出しますと、大勢の方に注目されます。

報告書のアンケートをとりますと、大体上位の3項目の中に生物多様性保全が上がるようになりまして、結果、生物多様性に取り組んでいる先進企業としていろいろなメディアに取り上げていただきました。

そのほかの活動として、「定量化を実現することにも挑戦しろ」と言われました。森林生態系保全プロジェクトの場合、ブランドイメージを上げることに繋がっても、ストレートに利益を上げる活動では決してない。そもそも社会貢献活動ですから。

でも、森林保全を行っていることは、本業での紙消費の負荷とつながる関係としてプラスの数字を上げているのではないか。地球環境に対してそもそもプラスになっているということを目的としているのであれば、定性的にではなく定量的に数字を上げてみようということを環境担当役員から言われて、「おっしゃるとおり」とは言ったものの、「また難しいことを言われたな」と思いました。

そこで2009年から定量化ということを考えましたが、これは非常に難しいチャレンジでした。先日の「リオ＋20」の中で自然生態系を数値化する「自然資本」の考え方が出てきたので、今後企業は自分たちの本業と生物多様性とをリンクさせる中で、どのくらいの自然の資源、エネルギーを使っているかを数値化し、それに対するプラス、マイナスの影響や効果を上げているかをきちんと報告書に出していく、そのような流れになっていくだろうと思います。

森林生態系保全プロジェクトの話をもう少しご紹介いたします。世界各国で様々なプロジェクトをやってきて、現在継続しているものと、終わったものとがあります。

事例紹介にロシアを挙げます。ロシアは非常に大きな国ですが、日本と非常に近い極東地域と呼ばれる場所があり、ここにアムールトラという世界最大のトラがいます。この世界最大のトラがすんでいる原生林を守るプロジェクトを200始めました。

この森林生態系保全プロジェクトは、環境NGOと連携して進めるもので、持続的にその地域の森林を保全していく活動です。そして、その枠組みを構築していくことをゴールにしています。地域地域によっていろいろと生態系が異なるので、持続的ということで考慮するのは、森林が保全されること、地域住民の方の生活が向上する・成り立つこと。その両方のバランスがとれないとうまくないということを考えて、それに向けたロードマップを描きます。

立ち上げ時のフェーズで、住民に対しての啓発、あるいは自然環境のリソースの調査を行う。共同フェーズでは、地域住民の方たちが主体的になって活動に取り組む。自立フェーズでは、プロジェクトが終了しても地域の中でその活動が続いていく枠組みを築く。これは主に経済手段になりますが、その手段をどうやって成り立たせるかを描きながらゴールを目指していきます。

例えば地域の中で森を切り、その切ったお金で生活している方がいます。ところが、森がなくなってしまうと、当然生活はできないという中で、お金を一時的にぽんと地元の方に渡すということではない。大事なことは持続的に生活できるということを考えると、魚を与えるのではなく、魚のと

り方、魚をとる網など必要な道具、あるいは技術などをプロジェクトでサポートする。いずれプロジェクトは終了することから、そのときに地元の方が持続的に生活できるような仕組みをつくることが大切です。

環境と社会と経済のバランスをどのようにとるかということを、プロジェクトでは関係者といろんなアイデアを出し合いながら、地元の方たちにモチベーションを上げていただいて取り組みました。

ロシアのプロジェクトサイトを説明します。こちらがタイガの原生林、こちらは日本の北海道です。大きなアムール川の支流にビキン川という支流があり、そこにクラスヌィ・ヤール村があり、ウデヘ族という先住民の方たちが住んでいる村があります。このタイガは、福島県ぐらいの広さの原生林です。タイガにはいろんな生き物たちがいて、生き物の一つに人間がいます。先住民の方たちは1000人弱住んでいます。そして、世界最大のアムールトラ、いま絶滅危惧にあり世界中で400頭ぐらいしかいないのですが、そのうち40頭ぐらいがここの森にすんでいるのではないかと言われています。

私がこのプロジェクトをぜひ始めたいと思ったのは、世界の中で唯一、トラとツキノワグマ、オオカミが共生している森に強くひかれたからです。香坂先生から熱帯雨林の伐採の防止キャンペーンという話があったのですが、リコーでも当初は熱帯雨林の伐採を防止するようなプロジェクトをやっていました。

川廷さんは写真家でもありますが、私は星野道夫さんに非常にあこがれていて、アラスカなど北方の自然に対して個人的な思いがありました。(笑) といって、アラスカはアメリカの一部で、先進国でプロジェクトをやるというのは会社の中で認められず、ロシアは途上国ではないですが、そこは何とか説明をして、北方のロシアの森林が切られると、地下にあるメタンガスなどが大量に出されて、温暖化につながることになりますよと言って。この地域の下は直接関係していないのですが、シベリア全体の森林と温暖化の関係を説明して、了解をもらえたのです。(笑)という裏話は、今だから言えるのですが。

一方で日本というのは、ロシアの北方林から木材を大量に輸入していまして、シベリアや極東地域の森林から、アカマツやカラマツ、エゾマツ、トドマツという、良質の材を、たくさん伐採して持ってきています。

これは、私が2005年に現地に行ったときの写真です。北方の自然環境では土壌の水分が多くて、森を一度切ってしまうと、なかなか元の森林再生はしないのですね。白樺の木が生えてきますが、白樺は30年ぐらいの樹齢なので、30年たつとみんな倒れてしまうのですね。その後、日本の森のようには再生していかない。そんな場所で、今でも森林が非常な勢いで伐採されている現実があります。

黒澤明監督がアカデミー外国語映画賞を取った「デルス・ウザーラ」という作品があるのですが、このデルス・ウザーラというのは人の名前です。彼が住んでいたのが、このシベリア極東地域。彼は先住民で、この先住民の村の方が大ヒットした「アバター」の話をしていたことがあります。

アバターというのは、まさに今の極東ロシアの森林地域の現状です。現地の森林はいつもねらわれています。外部の様々な企業が木材資源をねらっており、伐採をいつでもしたくていろんな動きがある。その土地に住んでいる方ではなく、外部の企業が利益を上げるためにいろんな理不尽、不公平がある。「アバター」の映画を見ながら、ここの土地と同じ構図だねと村人は言っていました。

「タイガの森フォーラム」というNGOがあり、私はこのフォーラムの運営委員をやっております。先ほどお話ししました、リコーによるタイガ保全のプロジェクトは、リコーとNGOのFoE Japanさんとの2者で協働しました。日本から2時間位でハバロフスクに行けてしまいます。非常に近い距離に豊かな自然がありながら、実は日本では殆ど知られていないということから、地球・人間環境フォーラムとPatagoniaを加えた4者で連携して「タイガの森フォーラム」を立ち上げ、日本の方たちに現地のことをよく知っていただくための映画をつくりました。今年に入ってから、

「タイガからのメッセージ」という映画をあちこちで上映し、結構いろんな方に観ていただいています。メーンの観客は大体社会人の方で、観客層としては30代の女性の方が一番多いですね。

このロシア極東地域の自然は、私たちの食卓に上がる魚とも密接につながっています。北海道大学の低温科学研究所の白岩先生がアムール川流域の自然を調査研究されており、アムール川というのは、源流がモンゴルにあり、モンゴル、中国、ロシア、日本とつながっていて、この4カ国の研究者が共同研究し、色々なことが分かってきているそうです。おいしい魚がとれることで有名な三陸沖は、世界で一番漁獲資源がある海域です。

この漁獲資源を支えているのが、実はアムール川です。特に、先ほど紹介したタイガの原生林が広がるビキン川流域です。この森から出てきた栄養素がビキン川からアムール川に合流し、それがオホーツク、太平洋の三陸沖で魚の資源につながっているそうです。非常に大きな生態系の中で、私たちの食卓、先ほど川廷さんの話にありました「いただきます」ということに繋がりますが、目の前の料理に出されたおいしい魚がどこから来るのか。もともと、どの様な自然とつながっているのかを連想をする上で非常に大事なことと思います。

先ほどの話で、4カ国の科学者が一緒になって、アムール川流域の生態系を研究しながら、どうやって保全しようか取り組んでいると紹介しましたが、これには正解はありません。「最適解」を求めて現場現場に応じて、関係する方たち皆さんが納得する解を「最適解」として、どうやって紡ぎ出していくのか、そのことが非常に大事かなと思います。私は、この「最適解」というキーワードが、サステナブルな社会を考える上で非常に大事と思っております。

実は、このタイガの現場に今年9月、東北大学の生態適応グローバルCOEが学生たちの研修を行う予定です。私がプログラムの一部をお手伝いさせて頂くことになり、それで「サステナブルデザイン」ということをやりましょうと提案したら、受け入れてもらいました。

学生たちと先生たちで、9月後半から約2週間程タイガの原生林に行きます。地元では生物多様性を含めて社会的に色々な課題があります。それに対して学生たちが、自分が研究しているいろんなテーマ、経済学の学生もいたり、農学の学生もいたり、社会学の学生もいたりする中で、自分の研究テーマを課題解決につなげながら、最適解のアイデアを事前に出し合います。

そして、現地に行きいろんな科学者、行政、NGO、村の住民の方たちと直接やりとりしながら、「最適解」を磨いていき、実際に使えるような企画であれば実施する構想を持っています。

話は変わりますが、私はリコーという企業の中にいて、この生物多様性がなかなか本業とつながらないという担当者としての大きな課題に対して、ずっと考えてきたことは、そもそも経済成長は何のためかということです。

これは最近、社会的によく議論されているものですが、毎年3万人を超す方が自殺しているという現実が日本にある一方で、先日ブータンの国王が来られて、ブータンの国民幸福度指数「GNH (Gross National Happiness)」というものが非常に話題になりました。物質的には日本のほうが豊かであり、ブータンのほうが物はないかもしれないのですが、国民の幸福度を考えると、ブータンはアジアで1番高いそうです。経済成長というものは、もともと国民が心豊かに過ごす幸せな暮らしのための手段であったはずですが、いつの間にか目的になりかわってしまった。

アメリカを中心とするグローバル資本主義、市場原理主義の影響があると思います。世界の人口が70億を超えた中で、現在の構図は、ピラミッド型でみると上にいるごく一部の人たちがとんでもない金持ちになり、下のほうでは多くの人々が疲弊しています。このことについて、『暴走する資本主義』とか『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』という本がいろいろ出されています。

資源、エネルギーが枯渇し、現在の資本主義の構図では未来は成り立たないということに対して、人々の新しい動きが起きつつあると実感しています。

2008年にビル・ゲイツがダボス会議に登壇しました。世界一の億万長者と言われる彼が企業活

動に対してあるメッセージを出しました。企業は、今まで資本主義の中で利益を上げることを最大の目的にしていたが、今後はもう一つ、社会からの評価に着目することが大事ではないかというメッセージを出しました。彼は頭のいい人なので、どういう思惑で言ったのか？自分の利益にどうつながるかを考えて言ったのだろうと思うのですが、新しい流れということで注目しています。

先ほどブータンのお話をしましたが、韓国、フランスにおいても、物をたくさんつくって、売ってという経済的な指標だけを表すGDPのみならず、国民に対してどの様な豊かさをはかれる指標をつくれるか検討しています。そんなことが、だんだんほかの国でも考えられている。生物多様性というのはまさに人間社会を基盤で支えていますが、指標の中にどう数字として組み込まれていくのかというのが大事と思っています。

自然というものは気持ちがいいね、ありがたいねという日本人は当たり前にわかっている感覚に対して、欧米は、これをきちんと数値化したいと考えて国際的な議論がされています。世界銀行がフィフティ・フィフティプロジェクトというのをやっており、自然の価値を会計情報にしていこうという考えで、国と企業は自分たちの会計情報に自然を数値化して発表するものです。

企業は、単に利益創出のみを考えることから、今後は持続的なビジネスを考慮することが大事です。法規制に基づいて環境負荷を減らし利益につなげる「サステナビリティ1.0」を2.0に上げるため、コストの削減、社会的な付加価値、社内の利益改善に重きを置いていたと思います。これからは、自分たち企業の中で使う資源やエネルギーの環境･社会に対する負荷を数値化して公表する。単に1社のみではなく、NGOなどいろんなセクターと協働しながら報告書に出すという「サステナビリティ3.0」を目指す動きになっていくのではと思います。

そのことを裏づけるのが「スペンドシフト」と呼ばれる新しい動きです。消費者が、お金を出して物を買うことに対して、人や社会の役に立つことに消費を繋げたいという動きが欧米を中心に広がっており、日本でも徐々に広がっています。特に若い方たちに、変化がだんだん広がってきていますが、このような社会的変化が、企業活動を後押ししていくのではないかと思います。

企業は、従来型ビジネスの自分たちが生産・販売する側で、お客さんは買う側ということから、今後は、お客さんと一緒になって自分たちのビジネスを進めて、自然に対する負荷を減らし、プラスの活動も行っていく流れが広がっていくことと思います。生物多様性の劣化を防ぐ、保全する、持続的に利用する、そんな賢い企業、サステナブルな企業が今後生まれてくるのではないかと期待しております。

香坂先生のお話の中でセヴァン・スズキさんが出てきましたが、彼女のお父様でカナダの科学者のデヴィッド・スズキさん、彼の言葉を最後にお伝えします。「動植物や微生物の織りなす壮大なつづれ織り、それなしに私たちは生きることができません」。これは日本人の基本的な感覚に非常に近いことと思いますが、この気持ちを大切にして、私も活動に取り組んでいきたいと思っております。

長時間、どうもありがとうございました。(拍手)

関谷直也

どうもありがとうございました。岸さんの今日のお話と重なるんですけれども、『企業が取り組む「生物多様性」入門』という本がありまして、そこに岸さんがリコーで取り組まれたことが詳しく書かれておりますので、ぜひ皆さん、ご興味のある方はごらんになってはいかがかと思います。

続きまして、独立行政法人国立環境研究所　生物・生態系環境研究センターの浪崎さんに発表をいただきます。サンゴ礁についてずっと取り組まれている方で、サンゴ礁の生態系保全についてのお話をいただきたいと思っております。よろしくお願いします。

浪崎 直子（独立行政法人国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター高度技能専門員）

皆さん、こんにちは。国立環境研究所の浪崎と申します。これまでの香坂さん、岸さん、川廷さんのお話はかなりグローバルな話が多かったかと思いますが、私は今、久米島という、沖縄県の那

覇から飛行機で30分のところにある島で、生物多様性保全の活動に取り組んでおります。今日はそうしたローカルな話題を、一つのケーススタディーとしてお話させていただきたいと思います。香坂先生がお配りになったキツネ狩りの資料の2枚目に「愛知目標」の概要がありますが、こちらの目標10にサンゴ礁が取り上げられています。「2015年までに、サンゴ礁、そのほかの脆弱な生態系について生態系を悪化させるような人為的な圧力を最小化する」とあります。この人為的な圧力を最小化するという取り組みを、どのように行っているのかという話をしていきたいと思います。

さて自己紹介ですが、私は琉球大学でサンゴ礁の生態学を専攻し、サンゴの繁殖生態を調べる研究に携わりました。卒業後は、東京に事務所がある海の環境NPO法人OWSに就職をして、普及啓発や市民参加型の調査の企画運営などの仕事に携わってまいりました。そして3年前から国立環境研究所に入り、現在は文部科学省科学研究費補助金「サンゴ礁学」という、研究者が65名ほど入っている研究プロジェクトの事務局として、文系や理系の研究をつなぐ異分野連携と、研究成果を地域に発信して、研究と地域をつなぐ地域連携の仕事を進めております。「サンゴ礁学」には、コーディネーターでいらっしゃる関谷先生と香坂先生にも参加いただいて取り組んでいるものです。そして同時に、今日ご紹介します、三井物産環境基金「久米島応援プロジェクト」にも参加して普及啓発の取り組みを行っております。

そもそもサンゴ礁とはという話を簡単にさせていただきます。サンゴというのは動物なのですが、サンゴの体の中に植物、褐虫藻と呼ばれるものが共生しています。このサンゴが粘液という物質を出して、それをえさにするカニや小さな魚などが集まってきて、また、それをえさにする大きな魚が集まってきて多様な生物群集をつくっています。サンゴが生きることで多様な生き物の棲みかになり、海の熱帯雨林とも言われているほど多様な生物群集を構成しています。そして、それらを水産資源として人間が利用して、また観光資源、海のレジャーの場としても利用されています。

一方で、サンゴというのは石灰化をして骨をつくります。サンゴの骨格などが積み重なり、このような地形を形成するんですね。ここで波の力を遮っていて、波の70%ほどの力がここで遮られるという研究結果もあり、サンゴ礁は自然の防波堤の機能も果たしています。こうしたサンゴが造る地形のことをサンゴ礁と呼んでいます。そして、そのサンゴ礁の地形の上に人間が住んでいる。このように、サンゴ礁はさまざまな階層の共生系で成り立っています。

このサンゴ礁は、近年のグローバルな気候変動などのストレス、そして陸から流れる土砂や、栄養塩などのローカルなストレスによって世界的に危機的な状態です。世界の半分以上のサンゴ礁が既に危機的と言われています。サンゴ礁は浅い地形をつくりますので、埋め立てにはちょうど適するということで、多くが埋め立てられ、サンゴ礁が破壊されているという現状もあります。

この写真ようにサンゴがいるところにはたくさんの魚がいます。シュノーケルで泳ぐと、こういう魚の群れが見られます。一方、こちらが劣化したサンゴ礁の写真です。私がダイビングを始めたのは98年ですけれども、ちょうどその年に世界規模の大白化がありました。沖縄では8割以上のサンゴが死んでしまったという地域もありました。私はその大白化の後にダイビングを始めましたので、どこもこんな状態だったんです。大学2年生でフィリピンにダイビング旅行に行った時、フィリピンの地元の方からは、観光客もすごく減ってしまって、娘さんは日本に出稼ぎに出てしまわなければいけないほどの経済状態になってしまったなんていう話も聞きました。人の生活にサンゴ礁が影響していることを知り、私はサンゴ礁を守る仕事をしたいなと思うようになり、大学院でサンゴ礁を勉強して今の職を続けております。

ここで一つの具体的なケースとして、サンゴ礁を保全するために、サンゴ礁に負荷をかけている、陸域からの赤土流出を防ぐことを目的としたプロジェクトをご紹介します。私どもの国立環境研究所やほかの研究所の方々、そしてWWFという自然保護団体が代表になって、久米島応援プロジェクトというのを3年前に開始しました。地域

を活性化しながら環境保全を実現する活動を実施・検証して、これをモデルとして国内外に発信することを目的としました。この赤土の流出という問題は、一農家さんに努力をしていただかないと解決できない問題なんです。

沖縄の条例で農家さんは赤土対策をしなければいけないという義務が課されているのですが、罰金が科せられていないということもあって、対策が進んでいないというのが現状です。

このプロジェクトでは町役場、小中学校、そして地域の三つのNPO団体と協力して農家さんの赤土流出防止対策を応援する。頑張っている農家さんを島内外にも宣伝して、協力農家を増やす。このような方法で活動を進めてまいりました。

赤土流出防止のための対策方法ですが、赤土というのはむき出しになった土、裸地に雨が当たることで、流出します。マルチングといって、この写真のように土の上に敷きわらをしたり、裸地となる期間に肥料となる植物を植えて植物で畑の表面を覆うというような対策方法があります。そしてグリーンベルトといって、畑の側面に植物を植えて畑の側面から土が流れるのを防ぐ方法や、工事現場で使う足場板を置いて防ぐ方法などがあります。そして沈砂池といって、海に流れる前に一度ここに水をためて、土を沈殿させて、上水だけを流すというような対策もあります。私たちのプロジェクトでは、グリーンベルトと緑肥といった営農対策を進めることを推進してきました。

これが調査結果の一つです。重点的にここの農地を対策すると効果的ですという農地を、土砂流出モデルをつくり算出しました。土地の傾斜、畑の作付けといった要因を元に、赤土が流出しやすい農地、つまり対策効果の高い農地のターゲットをまず決めました。そして、赤い丸の2カ所に赤土流出の観測機器を設置し、実際に赤土がどの程度流れているか、農家さんが努力した後、どれくらい赤土流出が削減できたのかということを測定する試みをしています。努力していただいた農家さんに努力は報われるんですよということをちゃんとデータで出そうという取り組みです。

この写真は対策効果の高い農地を町役場に提案して今後の方針を議論しているところです。この方が町長さん、この方が環境保全課の課長さんですが、ここの農家の方に協力を依頼するにはどういった方法があるのかということを協議しているところです。

こういった取り組みを町役場と進める一方で、私は小学校の総合的な学習の時間を活用して、川で生き物調べをしたり、老人会の方々に、昔の人と生き物の関わりを伺い、地図を作る授業を進めてきました。川廷さんのお話の中にも、昔の文化の中には生物多様性を大事にする文化があったんだというお話がありましたが、私も昔の人の暮らしや知恵から学ぶことが大事と思い、老人会でのヒアリングを授業に取り入れました。

これが授業でまとめた成果です。この地図を見たときに、私は感動して泣いてしまったぐらい、良い地図だなと思ったんですが、これは全部、子どもたちが書いたものです。

久米島は、昔は「米の島」と言われ、水田が広がっていました。それが70年代の減反政策で米からサトウキビに転換して、このように一面サトウキビ畑に変わりました。サトウキビは、春の植えかえの時期になると裸地となり、水田のように土を沈殿させることもできないので赤土が流出しやすくなってしまったという歴史があります。そういったことがこの地図から一目瞭然でわかります。この地図には他にこの辺の川で飛び込みしたよとか、この辺で生き物をとったよとか、ここの水車を利用してサトウキビをつくったよとか、そういった昔の豊かな自然との関わりがこの一枚の地図に表現されています。こうした赤土をテーマにした地図づくりの授業を地元のNPO、久米島ホタルの会と一緒にやりました。

この授業の取り組みは、地域の方々にも発表を通じて発信しました。さらには、グリーンベルトを植える赤土対策の実践にもつながりました。これが、グリーンベルトが成長しているところです。このように植物が成長して、ここで赤土をトラップして、せき止めるという構造になっています。

これ以外に久米島には二つのNPO団体があります。久米島の海を守る会という、地元で泡盛をつくっている酒造屋さんや化粧品会社さんといった地元の企業がつくった団体とも協働事業を行っ

ています。この団体とは、赤土の流出がどれくらい海にたまっているのかを調査したり、知り合いの農家さんに協力依頼して赤土対策を推進するなどで協働しています。

もう一つの島の学校@久米島というエコツアーをアレンジしているNPOとは、赤土について理解し、赤土対策の実践まで行う修学旅行生対象のプログラム立案を一緒にやっています。こういったNPO団体との協働を通じて、赤土の対策を広める取り組みを推進してきました。

これらが3年間で実施した普及啓発活動です。赤土対策を参加型で行い、連続講座で講演会を開き、小学校の授業を展開しました。また、マスコミへのプレスリリース、地元のお祭りや博物館での展示会などを行ってきました。

これまでやってきたことの課題として一つ感じているのは、やはり、赤土というのはネガティブな印象を持ってしまうんですね。しかも80年代からある、地元の人にとっては「わかってるよ、そんな問題」というような問題。それについて理解を深めてもらう、深く関わってもらうということは、なかなかハードルが高い。こういったさまざまな普及啓発を展開してきましたが、まだ広がりが弱いと感じています。今後島外ともつながることで、より広い普及啓発活動ができないかということを模索しています。以上です。(拍手)

関谷直也

浪崎さん、どうもありがとうございました。

続きまして、東洋大学国際地域学部教授の東海林先生よりお話をいただきたいと思います。東海林先生は、環境省で生物多様性センターのセンター長をされていた方です。では、よろしくお願いいたします。

東海林克彦(国際地域学部教授)

皆さん、こんにちは。長時間にわたるお話で大分疲れてきたんじゃないかと思いますけれども、もうちょっとですからご辛抱いただきたいと思います。

自己紹介をさせていただきますと、私は6年前に東洋大学に移ってきました。それまでは、ずっと環境省で役人をやっておりました。昭和58年に大学院を出て、24年間ほど環境省で仕事をして、東洋大学に移ってきました。

話を始める前に全体的な話をしますと、環境問題がこれだけメジャーといいますか、一般的になる世の中が来るとは、昭和58年に環境庁に入ったときにはみじんにも思わなかったですね。

私も環境に興味があって、というか環境の仕事をやりたいと思っていました。しかし、コンサルに入って環境問題をやるか、あるいは役所に入って環境問題をやるか、それしか道がありませんでしたので環境庁のほうに入りました。そのころは環境問題の仕事をやるというと、私よりちょっと年齢が上の方だったらわかると思うんですけれども、反政府運動と意外と似たようなイメージだったんです。新左翼的なイメージがあったと言ってもいいかもしれません。(笑)

つまり何かといいますと、環境問題をやるというのは文明・文化の進展に反対するようなアンチ的なイメージというか、行動をするというところがあったのです。ですから、実は霞が関の中にいても、環境庁の役人は「あいつらは変なやつらだ」みたいな感じでほかの省庁に見られていたんですけれども、今や「いいですね」と言われるような、かえってうらやましがられるような時代になったんで、すごいなと思っています。

こういった動きというのは、地球サミットのあたりから徐々に顕著になってきたと思っています。それに拍車をかけたのは、それこそ今日の川廷さんの発表の中にもありましたけれども、小池百合子さんが大臣になられて、チーム・マイナス6%という運動が始まってから、またさらに拍車がかかっている気がします。

象徴的に言いますと、環境大臣というのは閣議後の記者会見というのをやるわけですけれども、その当時、記者会見室というのは、後ろは汚い黒板とかだったんです。小池さんは、やはりテレビ局のご出身ですから、まず即座に、これはだめだ、後ろをきれいにしろというんで、いわゆる香坂さんのスライドにもあったんですけれども、ランドサットから撮影した地球の写真に変えて、何かの記者会見の様子がテレビに出るときには常にそれが映るようにしました。あれでかなり、実は環境というもののイメージ、潜在意識が変わってきた

というようなところがあります。

やはり、「うまいな」というふうに思いましたし、それから川廷さんの話を聞いていても、「うん、なるほどね」という感じで、こういう戦略も大事だなということでまた感心させられた次第です。

ただ、何て言うんですか、"Think Globally, Act Locally" というように、あるいは理論と実践の相互転換というように、いわゆる観念的な施策と、地に足のついた本当に泥臭い施策との両方がないと環境の問題というのはうまく進んでいかないんです。

実は、それは両方成り立ち得る、併存し得る話なんですが、現実的には何かトレードオフの関係にあるようなところがありまして、理論、観念の世界、イメージの世界が先行すると、みんなそっちのほうに走ってしまって地道な世界を忘れがちになります。一方、地道な世界ばかりやっていると、何だつまらないことをやっているというところで、実はトレードオフの関係にはないんですけれども、事実上のトレードオフの関係になっていて、両立していくのはなかなか難しいところになっているという次第です。

そんな問題意識のもとに、ちょっとこれから10分間ぐらい、簡単に話をさせていただきたいと思います。

実は生物多様性というのは、わかっているようでわかっていない、相手が何者かわからないというところが最大の問題と言ってもいいかもしれません。確かに、遺伝子・種・生態系の三つの多様性であると言われていますけれども、具体的にはわからないわけですよね。とにかく敵を攻めるには、敵の姿がわからないと攻めようがありません。相手が何人いるとか、どんな武器を持っているのかわからないことには、小銃で攻めたらいいのか、バズーカ砲で攻めたらいいのか、それともジェット戦闘機で攻めたらいいのか。100人で攻めたらいいのか、1万人で攻めたらいいのか、わからないんです。

ところが今、生物多様性という言葉だけが観念的にひとり歩きをして、その具体的な実像、姿、ビジョンというものを明確にしないままに、みんな局地戦を展開しているという状況にあると言ってもいいかもしれません。

「生物多様性というのはわからない」ということをわかっていただくための、問題提起の1事例です。断続的にオニヒトデというものが石西礁湖で大発生しています。久米島あたりもしかりですけれども。サンゴがえさになっているものですから食い尽くしてしまうんですよね。環境省などでは毎年モニタリングをやっているんですが、少し発生をし出すと駆除隊を出して徹底的に駆除します。ここで一つ考えると、生物多様性というのは種の多様性です。オニヒトデというのも生物種の一つです。なぜオニヒトデが嫌われて、徹底的に駆除されて、例えば、イリオモテヤマネコは大事に大事に保護されるのかというところですよね。イリオモテヤマネコだっていろんなものを食べています。というところでは基本的に同じですけれども、実はこういったところで、種の多様性云々といってもかなり色めがねをかけるといいますか、人間の主観でもって生物多様性というのを勝手に解釈してやっているところがあるということになります。

それからもう一つ、問題提起の1事例です。今、中山間地でシカとかイノシシ、これが大発生して、大問題になっています。農林業被害のみならず、いろんな被害が出ています。生態系の被害も実は起きています。

日光の中禅寺湖のあたりでニホンジカが20年ぐらい前から大発生して、これもかなり労力をかけて個体数をコントロールするのをやっているんですけれども、日光でニホンジカがふえる前、高山植物のシラネアオイというのが、たくさん自生していました。しかし、シカがふえた後は、シラネアオイは全くなくなってしまいました。シラネアオイというのはやわらかくておいしいものですから、シカが全部食べ尽くした。筋っぽくて、かたくて、おいしくないヤチブキ、これだけが残ってしまいました。

こういうようになった場合にどうなるかというと、当然、シラネアオイが群生する生態系、環境に依存していたいろんな植物、あるいは昆虫、動物、そういったものが、この地域から駆逐されてしまったわけです。つまり、生態系というものが

まるっきり変容してしまった。この変容を悪化ととらえるのか、そうじゃないととらえるのかというのはまたいろんな評価があります。また、シカをコントロールするのはけしからん、かわいそうだという話もありましたし、せっかくふえてきたニホンジカをやはり保護しなければいけないという話もありました。そのニホンジカを日光地域で保護した結果、実は生態系は大きな変化を起こしてしまって、いろんなところで、いろんな玉突き状態で、種の組成の変化というものを起こしてきたということです。

平成 11 年に鳥獣法が改正されてワイルドライフマネジメント、つまり、ふえ過ぎたシカとかイノシシを人為的にコントロールするという仕組みができました。この法改正は私が担当してやっていました。やらなければいけないという信念でやっていましたけれども、そのころは NGO から猛反対がありました。国会でも異例の審議時間を覚悟してやったというのが非常に印象的でした。

これを少しきれいにまとめるなら、動物を殺すことも自然保護のうちであるという、実は自然保護上の施策、思想の大転換がこのときに起きた。であるがゆえの、避けて通れないフリクションだったと考えることもできるかと思います。ただ、いろんな研究者の間でも、賛成してくれた人が半分、反対した人が半分というところで、ちょっと日和見的な研究者の方が多かったのが、私としては個人的に残念でした。

というところで考えていくと、実際、自然保護って何なんだ、生物多様性って何なんだというところが、観念としては、イメージとしてはわかっても、具体的にはわかりにくいものであるというところが理解いただけたのではないかと思います。

生物多様性というものに具体的な姿や、実像があれば、実施すべき保全施策がアプリオリに存在するという非常にやりやすいものになってきます。要は、人手と予算さえあればやっていけるものという考え方です。

もう一方の考え方が、生物多様性が単なる概念であるとすると、実施すべき保全施策というのがケースバイケースでといいますか、アダプタティブ、適応的に考えていかなければいけないということになります。

適応的管理というのは、今、いろんな野生生物の施策の中では主流の考え方になっていますけれども、その適応的な探索というのをやっていかなければいけないというところも考えられるのではないかと思います。どちらかといえば、私が結論を言ってもしようがないんですけれども、実は生物多様性とは「概念」に過ぎないもののほうに非常に近いものであると思っています。では、ケースバイケースで、その都度一から考えていかなければいけないかというと、やはり考えるヒントとか糸口、キーワードというものは得られると思います。それを考える糸口というのを、ちょっと話をしておしまいにしたいと思います。

生物多様性という用語がいつのころからか出てきたわけですけれども、これが誕生した背景、ここから探れるのではないかという切り口、それから、生物多様性という用語の普及に伴う環境施策の変化、ここから少し糸口が見つかるだろうというところで、この二つのポイントから少し話をさせていただきます。

自然環境に関する施策は、「自然保護」から「多様性保全」へ変わってきました。環境省の自然環境局、つまり、私のもとの古巣のところでも、今は自然保護とか自然環境保全というのはあまり言わなくなって、生物多様性保全という言葉を使うようになりました。内部的には、ほぼ同義の言葉として使っています。ただ、生物多様性保全という言葉に言いかえた結果として出てくる効果というか、違いというのは、大きく三つにまとめました。

①番目としては、自然環境資源を保護する意味、役割とか、必要性、それの説明が困難だったんですが、生物多様性保全という言葉を使った結果、意外と、するっとのみ込んでいただけているという効果が出てきました。

②番目としては、「生態系」といった全体的・広域的に保護していくという視点が、自然保護という言葉からはちょっと抜け落ちる場合があるんですが、生物多様性保全というと、そういう広域的な視点、全体的な、体系的な施策の展開といったようなニュアンスが非常に強く出てくることに

なりました。

③番目としては、普通種の保護というのは説明が困難でしたが、多様性保全という言葉が出てきた結果、これは非常に説明しやすくなったというところです。希少種の保護、RDB種とかレッドリスト種とかいったものは少なくなったんだから絶滅させちゃいかんということで、みんなが結構すんなり了解してくれるんですけれども、いわゆる、この辺を飛んでいるスズメを何で保護するのというと、なかなか理解していただけなかったんですよね。このような利点を挙げると、生物多様性保全というものの実像が少し浮かび上がってくるのではないかといったところです。

また、自然保護という言葉はかなり「手あか」にまみれた言葉になっていましたので、新たな言葉を使って展開していかないと、新たな施策を打ち出していけないというようなところもありました。冒頭で言いましたけれども、自然保護というと反社会的な意味合いを持った言葉として、あるいは行動としてとられていた節もまだまだありましたので、やはり、そういった意味で、手あかにまみれた自然保護という言葉から決別しなければいけないといったような事情があったということも確かです。

次に生物多様性国家戦略の変遷のポイントについて話をしたいと思います。

最初の生物多様性国家戦略、これはもう何もなかったので、出さなければいけなかったというところです。地球サミット、リオの会議を踏まえて、生物多様性保全をとにかく、いろいろと説き起こさなければいけませんでした。移入種問題、遺伝子利用問題、里山問題などのいろんな問題がきっかけになって、生物多様性センターも設置されました。センターは山梨にあるんですけれども、日本全国の自然環境保全基礎調査といいますか、いろんなデータセンターとして役立てるというところになります。

2番目の新・生物多様性国家戦略、第2次国家戦略ですが、国家戦略を進めるためには、何か、やはり目標を決めてやらなければいけない、あるいは皆さんの国民の危機感をあおらなければいけないというところで、3つの危機への対応といったような、ある意味センセーショナルな打ち出し方をしています。

自然がなくなってきているというのが、1つ目です。また、里山などの人間が手をかけて守られてきた自然というのが、中山間地なんかはまさにしかりですけれども、どんどん衰退してきているというのが2つ目です。

3つ目は、外から外来種などのいろんなものが入ってきて、日本古来の、従来の生態系が壊れかけている。とにかく今、リスキーなんだ、危機なんだというところで、危機感をあおって施策を進めようという、ある意味、そういう戦略に走ったわけです。

第3次の国家戦略は、今度は具体的な数値目標を掲げないと、何やればいいのかわからないからだめなんじゃないというところで、ラムサール条約湿地を10カ所ふやすとかいったような、具体的な数値目標を掲げていました。ですから100年計画とかいうような言い方もそれに伴ってしたわけです。そういうふうに具体的なゴールといいますか、達成点を持っていくというふうにつくり変えていったというのが第3次国家戦略ということになります。

最後に、最近の国家戦略です。これは何かというと、内部的にはかなり立派な国家戦略です。しかし、ある意味、立派過ぎて、ありがたいお経のようなものになっています。これはご存じのように、とにかく名古屋で会議がありましたので、その前に、日本として世界を引っ張っていくようなビジョンを示さなければいけないという、そういう政策的な意図のもとにつくられたものと考えていただいてもいいかもしれません。というところで、とにかく網羅的につくられたというような経緯があります。ですから、いろんな言葉を少しずつ使いながら、いろんなことが書いてあるんですが、こう言ってしまうと身もふたもないんですが、内容的には今までの焼き直しといったようなところかもしれません。

こんな感じで4回、いろいろと手をかえ品をかえ、生物多様性というものを浸透させ、普及させ、あるいは、その施策を推進させるための取り組みをいろいろやってきたんですが、まだまだ発展途

上といいますか、飛躍的にこれといったような解が見つかったような状況ではないというのが現時点の状況です。と言いつつ、数日前からでしたか、新しい第5次国家戦略の案ができて、今パブコメにかかっていますけれども、とにかく努力し続けることが大事ということでやり続けているというように評価していただければいいのではないかと思ったりもしています。

最初の話に戻りますが、まず敵を知ること、つまり、生物多様性保全って何なんだというところを具体的に考えるところから始めるというところも、また一つのやり方として大事ではないかというところを問題提起して、私の話を終わらせていただきたいと思います。

ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

関谷直也

東海林先生、どうもありがとうございました。

それでは会場の準備をしますので、5分間だけショートブレークを入れたいと思います。時間はちょっと短いですけれども、最後にパネルディスカッションをさせていただきたいと思いますので、少し休憩をいただければと思います。

(休憩)

関谷直也

では始めさせていただきます。簡単に振り返りをさせていただきます。今日の論点は三つぐらいあったのではないかと思っております。

まず、東海林先生のほうからまとめていただきましたが、保護という考え方から生態系という言葉を使って、メインとしては人の手を加えながら自然を守っていく、生態系を守っていくという考え方に変化してきたという話がありました。川廷さんからあった人工林の話もそうですし、浪崎さんからご紹介があったサンゴ礁の保全に関しても、あくまでも人の手が入りながら生態系をどのように守っていくのかという話でしたので、まずここのところが論点として整理されたのではないかと思います。

もう一つの観点としては、生態系サービスを人々が利用していくという観点。香坂さんから、「6次産業化」という象徴的な言葉がありました。これは1次産業、2次産業、3次産業を全部足し合わせて6次産業という言い方でして、どちらかというと農業や漁業の1次産業を営んでいる方が、加工や流通、そういったものまで全部含めて、最後、人の手に渡るところまですべてを産業化していく。つまり、それは食に関連する産業のことではあるけれども、言いかえれば生態系サービスをどのように利用していくかということであって、経済と生態系がどのようにかかわっているかというところが大きなポイントであるというご指摘であったかと思います。

今まで問題になっていたCO_2削減の問題や地球温暖化の問題というのは、企業の社会的責任や排出権取引などが求められてくるという議論のところから入ってきていると思います。生物多様性では食に関連する産業というのは、今回いろんな方がご紹介されましたようにわかりやすいけれども、それ以外のところでは会社の経営陣が納得するのはなかなか難しいという話が岸さんのほうからありました。

後でもう一回、最後にお伺いしてみたいと思いますが、川廷さんも岸さんも結局、企業経営という立場に最初かかわっておりながら、川廷さんは今でもそうですが、一方でNGO、NPOという立場を生かしつつ今活動されているということは、やはり生物多様性の保全と企業経営とは相入れない部分が何かしらあるのではないかと、というのが私の感想です。

また一番最後に、やはり人々に理解してもらうことです。香坂さんはメインストリーミングという言い方をされていましたけれども、もっとわかりやすく言えば、東海林先生が「敵を知る」という言い方をされていました。わかってもらうこと、生物多様性を理解すること、それ自体が本当に難しいという話が中心としてあったかと思います。香坂さんからはキツネという生命倫理の話であったり、また川廷さんは、率直に言って、食べることを中心として、いかにみんなに興味を持ってもらってコミュニケーションをとっていくのか、ここら辺が一つ大きな課題なのではないかというお話がありました。

どのように生物多様性を考えていけばいいのか、また生態系サービスの利用、産業、経済との

かかわりをどのように考えていけばいいのか、またコミュニケーションをとって、人々に理解してもらうことをどのように考えていけばいいのか、主にこの三つが主要な論点であったのではないかと思います。

そこで、いろいろお伺いしたんですが、私、皆さんのお話を聞いていて、まず一人一人にご質問をさせていただきたいと思います。生物多様性、もしくは環境問題に関心を持たれたきっかけは何なのかというのを、お伺いしたいなと思っております。

と申しますのは、私、環境問題のコミュニケーションというものを研究しております。東洋大学社会学部で環境メディア論というものをやっていまして、なぜ環境問題に興味を持ち始めたかと申しますと、昔、中学校のとき生徒会をやっておりまして。1992年当時の先生は、いろんな親から左翼系だとか言われて、「左翼系が学生をイニシエーションして」とかいろいろな言い方をされていました。その中で私も一緒になって段ボールを集めたり、空き缶を集めたり、今では当たり前のことですが、そういうことをやっていました。

最初やっていたときに人の目がものすごく冷たくて、何でそんな変わったことをやっているんだろう、そんなことやらなくてもいいじゃないか、ごみの回収業者が集めてくれるんだから、そんなことほっとけばいいだろうみたいなことをさんざん言われたんですが、だんだんとテレビや新聞で取り上げられてくるようになって、1年後になると隣の中学校がまねをしてテレビで取り上げられるようになって、周りの人々から「よくやってるね」と声をかけられるようになりました。

私の父は当時、建設会社に勤めていたんですが、最初のころは、開発とかそういう建設の仕事を否定するのかと言っていたのに、1年後になってみるとその建設会社が、環境を大事にする、環境を守っていきますみたいなことを言い始めて、「おまえのやっていることはすばらしい」と、言っていることがころっと変わったんです。この、人の意識の変化というか、私はそれで、人の心理とかを変えるメディアの力、世の中の雰囲気って一体何なんだろうと。この世の中の雰囲気は何で変わっているのかということに関心を持って、環境問題とコミュニケーションというところに関心を持って研究するようになりました。

その後、たまたま大学院に入ったときにJCOの臨界事故が発生して、環境問題の側面と災害という面が合わさった事故から研究をスタートさせていますので、原子力のことだったり災害のことを研究してきています。それぞれきっかけがあると思います。今日は聞いていたところ、それぞれの方がやはり原体験というか、環境とか生物多様性、生態系というものに関して何か考えを持っておられたから、今こういう仕事をされているのではないかなと何となく思いまして、そこら辺のところからお伺いできればと思いますが、どうでしょうか。では川廷さん。

川廷昌弘

僕は兵庫県の芦屋の出身で住宅街ですが、海、川、山があって、箱庭的な自然体験をしていました。多分それは小学校4～5年生のころの楽しいよき記憶というのがあるんですけど。何より実は阪神・淡路大震災でタンスの下敷きになるという被災経験があります。天災の後には人災がやってくるということで、その後の地域開発では、人の利益・不利益が理不尽に都市開発がおりてくる。それを目の当たりにした地域づくりを見てきて、自分の世代ではなくて親の世代ですが、今まで笑顔で接していたその地域の住人が、自治体の計画に基づいて話し合っていろんな問題が起こってしまう。だけど、そうやって地域づくりというのはどんなことがあっても進んでいく。で、また壊れた町の瓦れきの上に新しい町ができている。僕の少年時代のよき記憶の町というのは、平成の平凡な町づくりになっているんですが、それでも人の営みというのは続いていく。いわゆるサステナブルなものというか、それが持続可能かどうかはおいておいて、そういう原体験があった。

その後に、先ほどありました「情熱大陸」という番組をつくったときに、あれは人のモチベーションをつくっていって社会を動かすみたいな、そういうコミュニケーションです。それをつくることですごく熱意を持った活動ができたので、そういった経験の後、「チーム・マイナス6%」の

仕事に入って、それが全部、結局、そこから自分の引き出しをどんどん出していった感じがしています。それによって環境省の人たちとすごく意思の疎通ができて、眠っていた、そういった地域で体験したことが、自分も何か役に立つんじゃないかということで動き始めたという、そういうソーシャルのモチベーションがうまく引き出された感じではないかと思います。

岸　和幸

私の原体験になるのですが、1997 年、32 歳のときに屋久島にあるモッチョム岳という山に登りました。屋久島に行かれた方はご存じだと思いますが、「一月に 35 日雨が降る」と言われるぐらい非常に雨が多いところですね。12 月でしたが、その山に登ったのはその日私しかいなかったのです。当時、日本のあちこちの山を登っていて、ひたすらピークハントで、てっぺんに行っては気持ちよさを感じていました。屋久島でも同じように頂上に登って、この山をある意味征服したような感覚だったんです。で、山道を登っている間は、周りの自然は全然気にはなっていなかったんです。山に登って頂上に行くということが目標であって、途中のプロセスはあまり気にしておらず、周りの自然は見ていなかった。

ところがその日、モッチョム岳のてっぺんに行ったときに、いきなり下のほうからどんどんどんどん白い雲が上がってきたのです。とても速いスピードだったので、これはやばいなと思い急いで下りる様にしましたがホワイトアウトになってしまいました。ちょうどモチベーションが下がっている時期だったんです。プライベートで、ちょっと恋愛絡みでよくないとか、仕事でトラブルがあったとかそういう状態のときで、気がつくと足がどんどん下におりてしまってしばらく行くと、がけみたいなところに出ました。

すると、江戸時代頃から使われていない様な古い登山道があるのですが、倒れている屋久杉がいっぱいあり皆コケむしているんです。「ああ、ここを下りていけば行けるかな」と思っている自分がいて、一方で「ここを下りっていったら、おれは死ぬぞ」と思う別の自分が身体の中にむくむくっと出てきて、その不思議な 2 人の自分がやりとりしていました。

そのとき、いや、おれは死にたくないんだという気持ちが勝り、気がつくと胸やほっぺたをたたいて、自分の名前を大きい声で叫びました。正気に戻すというか、正気の自分をメーンにするという感覚だったのかなと思います。

正気に戻ると、こんな道を下りたら絶対死んでしまうということで、そこから慎重に慎重にもとの山頂まで戻り、その後は幸いにだんだん霧が晴れてきて雨は降らなかったんです。山道にある木の枝に赤いリボンがあったり、木に赤いテープが張ってある。ああ、ここまで来れば大丈夫だというところに着きました。実はその日、水筒を宿に忘れて一口も水を口にしていなかったのです。水場をチェックしていた場所に着くと、ものすごくのどが渇き、ガブガブガブガブ水を飲んだんです。そしてちょっとへたり込んじゃいました。へたり込んだときに「やばかったな」「危なかったな」「下手に下りていたら死んでたかな」とか……。事実、私がその迷いかけた道は、近くに白骨死体が見つかったのです。半年後に新聞をめくっていて記事を見て、ぞっとしたんですけれども。

自分が水を飲んだときに気づいたのですが、生きているということは、32 歳になるまでずっと当たり前だと思っていました。親にいろいろ面倒を見てもらっていながら、自分が生きているのは当たり前だと思っていたのですね。人間というのは実は小さなものであり、道の中で迷って運が悪ければ死んでしまうかもしれない。生きているということは、実は当たり前ではないんだということがわかりまして、そのときに、「生かされている」という不思議な感覚になりました。頭の大脳皮質からではなくて、お腹から出てきた感覚なんです。そのことを気づかせてくれたのは水です。水を飲んで、今まで見えているようで見えていない自然の中に、自分と同じ命が幾つもあったことを実感しました。宮崎駿監督の「もののけ姫」、あの森の中にあるいろんな大小の命ですね。そのときに、ああ、自然というのはこうやって循環しているんだなという感覚になりました。

水のおかげでそれを体験でき、今自分が吸っている空気は恐竜時代にあったような空気かもしれ

ない、それを自分が吸って生きているのかなと思います。それから私は、生物多様性、命のつながりとか自然の循環というのに目を向けて、おふくろである自然に対して、どうして息子である人間が、あちこちを痛めつける、首を絞めるようなことをしてしまっているのだろうか？もしそれが進んだら、自分自身も生きられないじゃないかという感覚になったんです。それに気づいてしまった以上、自分はそれに対して何ができるのかを考え走ってきたというのが、先ほど講演させていただいた内容です。長くなりまして、すみません。

浪崎直子

私は、実は川廷さんのすぐお隣の宝塚市出身なんです。サンゴ礁を始めたきっかけは先ほどお話しした、フィリピンに行ってサンゴが無くなり人の生活にまで影響していることにショックを受けたということです。もともとは自然に全く興味がなくて、自然で遊ぶより家の中で友達としゃべるほうが楽しいという子どもだったんですけれども、高校の生物の先生が好きで、大学で生物学科に入り、周りに生物好きが多くて、そういう生物好きと一緒にいる中でだんだんと興味を持っていったというのが正直なところです。こういうことをやっていると子どもの頃、虫とりをしたとか、そういうことをおっしゃる方が多いんですが、私は全くそういう経験がない中で育ちました。

そして、今日お話しした地図ですが、子どもたちと一緒におじいちゃん、おばあちゃんに昔の自然のことをヒアリングに行ったんです。どこで遊びましたか？昔どういうところでおかずをとりましたか？という話を聞くと、もう目をらんらんさせて生き生きと話をするわけですよ。今日お見せした地図を展示するだけで、「ああ、僕はこの辺で木の実をとってね」とか「この辺で田植えして、すごい寒くて大変だったんだよ」とか、食べ物だけではなく、仕事とかそういったいろんな思い出話が尽きないぐらい出てくる、そういう体験をしまして、私なんかよりもすごく自然に身近で、そういう中で生きてこられたんだなということをそのヒアリングを通じて感じました。

川廷さんのお話にもありましたけれども、それまで私は、生物多様性ってとらえどころがないなと思っていたんですが、おじいちゃんおばあちゃんには本当に身近で、普通のコミュニケーションには出てこないけれども、ちょっとした工夫ですぐに楽しい思い出として語られる、そういうものなんだなということをこのヒアリングを通じて感じました。

東海林克彦

私が環境問題をやりたいと思ったのは、開発で自分の子どものころの遊び場がなくなってしまった、そういったものが引き金になっているかもしれません。私は山形の田舎の生まれなので、小さいころはとにかく外で、山の中で遊んでいたわけです。夏になれば、アケビをとりに行って食べたりしました。それから、あのころはたきつけなんかも必要だったので、松ぼっくりを山にとりに行ってそれを袋に詰めて、1袋30円で売れました。子供たちにとってはそれが結構貴重なお小遣いだったりして、ああ、これでまた駄菓子が食べられるとか、そんな楽しい思いをしたんですよ。

ところが中学、高校生ぐらいのときに、その山がゴルフ場開発でなくなってしまいました。ちょっとませていた子どもだったのか、中学、高校のときに、そういった経験を自分の子供にもさせてあげたいなみたいな気持ちをちょっと持ちながら、その山をずっと見ていたような記憶があります。それがある日突然、ゴルフ場開発が入ってしまって、なくなってしまった。「何なんだ、これは」と思ったわけです。1ヘクタール、2ヘクタールの山でもたかだか10万円もしないようなものだったんですが、たったの10万円であれだけ楽しい思いをすることができる場所をなくしてしまうというのは、これは何なんだろうということで、そこから始まったような気がします。

関谷直也

ありがとうございました。岸さんと川廷さんは生死に対する体験で、また東海林先生の場合は子どものころの体験だったかと。あと波崎さんの場合は、先ほどの話の中でおっしゃっていたようなことですか、そういう直接的な体験だろうと思います。これは結構つながっていると思います。

例えば先ほど岸さんから、タイガ（「タイガからのメッセージ」）の映画について、観客層とし

て30代の女性が多いということをおっしゃっていましたけれども、私がヒアリングをしていると、いろいろな環境問題に関して関心を持っている人は、どちらかというと都市部に住んでいる30代、40代の女性が多い。それはどちらかというと原体験として、ある意味、都心部に住んでいて、そういったものを喪失してしまっているのではないかと。あと、もともと田舎に住んでいる人は、自然を感じようというふうな教え方にはならないので、あえて都市部に住んでいる人がそういうものに興味を持つ傾向がある。これもやはり、今の生物多様性の問題をどのように考えていくか、またどういう人が求めているかという問題にもつながっているのではないかと思いました。

時間がすごく少なくなってしまいまして、あともう一巡ぐらいしかできないかと思いますけれども、最後にもう一言ずつ、今日の中身を踏まえてご質問を投げさせていただきます。会場のほうからご質問をいただいていますけれども、これも合わせてお伺いするという形にしたいと思いますので、全部にお答えいただく必要はありませんので、どれか自分が一番答えやすいものにお答えいただければと思います。

まず生物多様性の取り組みについて、障害、課題はいろいろなところでお話しいただいたかと思いますけれども、例えば会場の清原先生からの質問では、「国際活動において中国の方針と対立することがあると思う」。また、経済学部の鈴木孝弘先生からは、「利益が最優先である途上国や中国などでは、こういった生物多様性の取り組みを受け入れることは難しいだろう。国家対立や中国との問題というのが、障害、課題の一つになっているのではないか。これについてどう思いますか」という質問が来ております。

また、企業経営とのつながりについて、経済学部の澁澤先生からもご質問が来ております。「そもそも生物多様性というのは企業経営に相入れないものではないだろうか、利潤追求と一致するものではないのではないだろうか」という趣旨のご質問です。これについてどう思われるか。

また特に今日、キーワードとして、数値化という言葉が結構出てきたと思います。やはりいろいろな方々に納得してもらうためには、数値化が必要だと。これはどちらかというと生物多様性の問題ではなくて、最近のビジネス上の傾向という感じがします。例えば研究においても、論文を何本か示せみたいな数値化とか、あと研究をやったらきちんとパフォーマンスを示しなさいよと、何でもかんでも数値化を求められる傾向というのは、生物多様性に限らず社会全般の傾向だと思います。そういうふうに数値化して見えるようにしないといけないというのが、問題として1個あるのではないかと思います。

また、里山問題、サンゴ礁、あとタイガの問題と、いろいろありましたけれども、さまざまな対象の中で、取り組もうとする場所や対象となる条件みたいなものがひょっとしてあるのではないかと思いました。何となくですけれども、その対象として選ぶのは個人的な経験から来ているような気もしますが、これについてご意見がございましたらお伺いできればと思います。

あと、これはもう繰り返しになりますけれども、コミュニケーション上の課題として人々への意識啓発、これはやはり最終的には避けて通れない問題だろうと思います。今日、川廷さんのお話の中では、身近な生活のところから伝えていくしかない、また何人かの方のコメントの中から出てきたのは、食、食べることという人間の根源的なところからコミュニケーションをとっていくことが重要なのではないかというお話もあったかと思います。これについて、人々の意識啓発を促すにはどうすればいいか。

もう時間がありませんので、すべてにお答えいただく必要はございませんけれども、今日の感想も含めて思われたことを一言ずつ、今日の総括という意味でコメントをいただければと思います。

川廷昌弘

幾つかの質問で、自分が興味のある質問に対して答えようかなと思います。一つは途上国との対立というところで、COP10で垣間見てきたものでいうと、成長できるリソースは何かということがすごく重要だろうと。途上国はもちろん先進国に対して資金を求める。例えばCEPAの決議でも15カ国の途上国が発言したんですが、言った

ことはリソースを求めるということで、人の支援と金の支援だったんです。でもそれは逆に言うと、先進国が提供できるリソースでもあるし、それを提供することによって途上国の考え方が変えられるのであれば、そこに利害はないのではないかとも思うわけで、融和という形ができるのではないか。

中国は非常に微妙だと思いますので何とも言えませんが、特に、出ていたのは南の国でしたので、そういった途上国に対しての融和、共有、絆づくりというのは現在もあると思いますし、そこは越えられることなのかなと感じました。

企業経営と相入れないかどうかということは、僕は決してそうは思わないです。というのは、やはり企業のCSRと同じことだと考えていまして、CSRをCSR領域として考えるかどうか。これを生物多様性領域として考えるかどうかということに近いのではないかと、個人的にはそう思っています。

要するにCSRというのは本業そのものであって、決して領域ではないというふうに考えたとする。つまり人の心の中に必ずある、地球に対する恩返しという心があれば、本業の仕事の中で自分が何をしなければいけないかという人としての責任を考える仕事をすれば、おのずとそれぞれのセクションで答えがあるはずだと。それはガバナンスだろうと、コンプライアンスだろうと、人事問題だろうと、人権問題だろうと、収益を求めることであろうとすべて同じことだと考えています。今、博報堂のCSR部長をやっておりますので、これはCSR部長としての見解になるので、「おお、博報堂のCSRはそういう方針かよ」と言われそうですが、それを目指すということです。

当然、人事制度でそういったことをやるのは当たり前ですから、それは当然やっていますが、では本業の中で広告会社が何をするのかというのは、当然すべてのクライアントやメディアの仕事の中で、私たちが果たすべき責任というものを考えて仕事をするということです。それは理想的な話ですが、現実的にそうしないと地球は待ったなしですから、得意先の持っている商品がどんな社会問題に対応しているかということを理解して、仕事のデザインをしていく。そして、しかるべき相手に対してコミュニケーションをデザインするという、極めてシンプルでわかりやすい話だと思っています。それは人として当然やるべきことだと感じているので、「それが私たちの仕事です」というふうに社員全員が言えるようになるのが、博報堂のCSRを目指すところだと考えています。ですから、それはひいては生物多様性の保全も同じことであって、人間の生存の基盤であるという話ですから、それを考えると、これは企業として取り組んで当然のことだと自分は思っているわけです。

それからもう一つ、数値化の話。これは確かにおっしゃるように企業として求められるというか、現在求められることだとは思いますが、数値化というのは多分可視化であったり、共有化であったり、やはり共通言語化することだと思うんです。ですから、チーム・マイナス6%でもやはりCO_2の可視化ということをやりました。それはCO_2の絶対量を見せることです。CO_2自体の存在は空気ですからよくわかりませんが、やはり量的なものを見せることで、みんなで共有できるものになることは間違いない。あとは、例えば家からこんなCO_2が出ますと、バルーンをつくってイベントで見せたりしていろいろな工夫をしました。それは数値化でもあり、共有化でもあり、可視化でもあるということで、それがないと自分の努力が一体どういうことになっているのかという説明も非常に難しいのではないかという理解をしています。

それから、保全エリアの対象を選ぶ条件というのがありました。一つは、郷土愛というのはすごく大事だろうと思っています。自分のふるさとを守るというのもあるし、第2のふるさと、第3のふるさとと思えるような愛せる場所が人にはあるので、そこを守るということはそこの地域の資源を守る、その自然資源を守ることにつながるわけですから、多分それは生物多様性の保全に資するだろうと、もしくはニアリーイコールではないかと感じます。

僕の場合は流域にこだわりたいと思っています。里山だけではなく、山だけではなく、海だけ

ではなく、やはり流域という一つの考え方、これを自分の守りたいものとして考えていきたいと。やはりそれは人とのつながり、自然とのつながり、都市と山村、都市と山、都市と海、さまざまなつながりを織りなす一つのキーワードとして、流域というのはこれからの生物多様性には欠かせないということは、これまでもそうですが、あえてそこは強調したいと思いました。

それと、コミュニケーションの意識啓発のところは私の専門領域ですが、このテーマは自分ごと化です。どこから語りますというよりも、生物多様性を自分ごと化するにはどうしたらいいですかということだと思います。それは、やはり皆さんにとっての暮らしの視点。日常生活の動線上のどこかに必ず埋め込まれていなければ、私たち自身、自分ごと化には届かないので、それを考えるとやはり暮らしの視点。もっと言うと、衣食住、生きているものを殺したりしないといけない人間なんだということをどううまく伝えていくか、あとはコミュニケーションのわざだと思います。すみません、長くなりましたが、以上です。

関谷直也

岸さん、お願いします。

岸　和幸

企業の中に身を置いてきた中で、質問にありました、「生物多様性保全活動を企業が行う場合、利益創出とそぐなわないのではないか？」を考えてきました。生物多様性を理解しにくい人たちに対して、このことをどの様にコミュニケーションをするかは大きな課題でした。

一方で生物多様性の理解というのは、企業の中にいるから理解が難しいということではなく、例えば日本の社会の中で、生物多様性はそもそもどのくらいの人が理解しているんだろうか、世界のほかの国の人たちはどうなんだろうかが気になっていました。2009 年、ドイツの環境研究機関の方が来られたときにその様な話をしました。

日本の場合、これは間違っていたら東海林先生から後で訂正いただきたいのですが、2008、2009 年ごろのアンケートで、日本人で生物多様性を知っている、あるいは、人には説明できないが生物多様性という言葉を聞いたことがあるという方は、約 3 割。多分、アンケートというのは都市部中心ではないかと思いますが。

ドイツはどうなっているかというと、実はドイツもどっこいどっこいで 35％ぐらいという話を聞いて、「あ、同じくらいなんだ」と言いながら、どうしてドイツのほうが力を入れている様に感じられるのだろうと思いました。例えばドイツのある地域では、都市の中に緑があるのではなく緑の中に都市がある。その中に行政があり、経済があります。日本とドイツの都市でそれぞれ住んでいる市民が、生物多様性ということを人に対してはうまく説明できないながらも、それを自分たちの生活の一部に組み込んでいるドイツ、必要か必要ではないかという選択の中でプラスアルファ的に理解している日本との違いはどこから来るのだろうと考えました。

それについては、なかなかこれという形で説明するのが難しいですね。企業はまず利益、利益と言う中で、そもそも企業の利益というものは当然数字であらわします。数値化、定量化が必要。価格、値段をつけて、それを売り買いして、目に見えるものです。目に見えるものであれば、社内でも社外でも共有化される中で、生物多様性、自然は値段がなかなかつけにくいものです。自然に限らず、その土地土地で織りなしてきた文化、あるいは歴史というものは値段がつけられない。文化の多様性も含めて価値がつけられないものを企業活動の中に取り込むのはなかなか難しいことです。

だからといって何もしないのではなく、自然を資本であるととらえて、できるところから数値化を始めるのは大事だと思います。生態系サービスに対して、2010 年の COP10 で「生態系と生物多様性の経済学」（TEEB）の中で、例えばある熱帯雨林では、水源涵養の機能に対して、それを公共工事でやった場合には幾らぐらいであるとか、あるいは土壌の保全は幾らの価値があるという数字化の考えが出されました。それは、企業としては生物多様性に取り組みやすくなる歓迎すべき数値化であったと思います。もちろん数値化が絶対ではありませんので、それをこれからどうやって精緻化させるかという課題があります。

一方で、目に見えるものだけを考えれば良いということではないのです。氷山の例にあるように、海に浮かんでいる氷山で、上のほうに見えているものは一部ですね。目に見えない下の部分も確かにあり大きいということ意識して、企業は表面的なものと、それを支えている目に見えないものについて生物多様性の価値を認め、事業活動にどうやってリンクさせていくかは、まさにこれからの企業の大きな課題の一つであると思います。以上です。

関谷直也

ありがとうございました。一番新しい平成22年、国際生物多様性年（2010年）の9月東京都の調査で、生物多様性という言葉について、「言葉の意味を知っていた」が34%、「意味は知らないが言葉は聞いたことがある」が34%、「知らない」は32%ですので、「詳しく知っている」が3割、「聞いたことはある」が3割、「全く知らない」は3割という状況が一番新しいデータかなと思います。浪崎さん、お願いします。

浪崎直子

まず取り組みの対象地域を選んだ理由ですが、なぜ久米島を選んだのかというと、一つには、WWFが選定した生物多様性の高い地域として選ばれていたということがあります。他に、久米島は宇宙から撮る衛星画像に1枚にちょうど収まることも。参画している研究者に地理学者がおりまして、衛星画像を使って土地利用を分析する者がおり、そのような理由もありました。そしてラムサール条約の湿地もあり、町長がそういったことに熱心で、関係活動をしているNPOの方がいるといったことなどからこの地域を選定しました。

先ほど川廷さんから流域というキーワードが挙がりましたが、私も流域というのはすごく重要だと思っています。東海林先生から、オニヒトデを駆除して、一方でサンゴを守っていくというのは、生き物の価値を主観で判断しているところがある、という問題提起がありました。そもそもオニヒトデが増えたのは、陸域から流れる赤土、栄養塩といったものが原因だと言われています。つまり、人間活動の結果増えてしまった。そのために駆除をせざるを得なくなってしまったという状況があって、サンゴ礁を研究している者もサンゴ礁だけに目を向けるのではなくて、陸域にもきちんと目を向けて、根本的な対策をしなければいけないということを指摘しています。そういった対象地域を決めるときには、海、川、森を繋ぐ流域ということが非常に重要なキーワードだと私自身も感じております。

そして、数値化ということですが、研究所におりますので、否が応でも求められます。普及啓発、つまり、研究成果を地域に伝えて、地域の保全活動を推進するということを行ってきましたが、それがどれくらいの効果をもたらすものなのかということを数値で出す試みも始めています。どのように数値化、定量化すればいいのかを今まさに関谷先生に相談に乗っていただきながらアンケート調査を実施しているところです。こういった活動が地域の方々にどれぐらい浸透して、意識がどれくらい向上したかということが、アンケートで出せればいいなと思っています。

関谷直也

東海林先生、お願いします。

東海林克彦

私ほうからは2点申し上げたいと思います。環境問題をずっと仕事でやっていましたので、ちょっと立ち位置が違った表現になってしまうかもしれません。といいますのは、ずっとやりたかったこと、考えていたこと、それが最近ようやく花開いてきたねという感覚で見ているものですから。

1点目は、生物多様性です。多様性と言いつつ、多様性保全の考え方の多様性を否定してしまうような動きが、少し出てきているのではないかと思います。生物多様性保全と言いつつ、その生物多様性保全にはいろいろな考え方や思想があるはずですけれども、その考え方の多様性というのを少し否定するような動きが出てきているのではないかということです。香坂先生のキツネ狩りの話もまさにそうだと思います。実は数値化というのもわかりやすいがゆえに、大衆迎合政治ではないですがポピュリズムに走るような、そういう危険性が少しあるような気がします。

特に環境施策というのは、メディアと深く結び

つきながら進展を遂げてきました。今まで持ちつ持たれつでやってきたんですけれども、メディアというのは飛躍的に人の心や意識を変える力を持っているがゆえに、人の考え方や多様性というものを固定化してしまうというものすごい危険性を持っていると思います。これは今かなり注意しなければいけない段階に入りつつあるのではないかと思っています。

それから2点目は、CSRは企業活動、経済活動と両立し得るのかというお話ですけれども、これは、古きよき日本人の心を取り戻すというだけではないかと、個人的には考えています。例えば田園調布を開発した第一勧銀（第一国立銀行）の澁澤榮一さんは、道徳経済合一説というのを唱えました。簡単に言うと、単にもうければよいものではないということです。近江商人の家訓というのがあります。近江商人というのは商売上手の集団で昔から有名ですけれども、実は近江商人の家訓にも、道徳経済合一説みたいな考え方がしっかりと書かれているわけです。こういったことから、古きよき時代の日本人の心を取り戻すということが、実は環境問題を解決する、あるいはCSRそのものではないかと考える次第です。

関谷直也

どうもありがとうございました。東海林先生の言葉に、言葉をつける必要もないと思います。今日は皆さんの活発なご意見等々のおかげで非常に有意義なディスカッションになったのではないかと思います。

本当は私もいろいろ話をしたいことがあるのですが、残念ながらお時間がありません。それでは最後に総括として澁澤先生におまとめいただきたいと思います。よろしくお願いします。

澁澤健太郎（経済学部教授）

現代社会総合研究所の運営委員をしております澁澤でございます。

数日前の報道で、環境省が生物多様性を保全する数値目標を20以上追加したという記事がありました。確かに最近そういう記事が、メディアに随分出てきているように思いますけれども、実際問題としてその報道の時間の枠組みや新聞の紙面で割かれている量は、さほど多くないのではないかと。むしろ政局や消費税の見解についてが、大変多くのウエートを占めているのではないかと思います。といいますのは、やはり生物多様性というキーワードが大変難しい。僕個人も今日そのお話をさせていただくということで、専門は経済でございますので、いろいろな本を読んだり勉強させていただきました。当たり前ですが、やはりそれでもなかなかわからない。

そういう中で確かに3割、3割、3割というお話があったように、自分たちが生物多様性についてどういうことをしたらプラスになるのか。例えば東洋大学のホームページを見ますと、「甫水の森」というのが出ていたんですね。ただ、その森と書かれている街路樹や木がどういう木であって、原産地がどこかというプレートがついていると書いてあるんですが、学生は多分ほとんどそれを読んでいないだろうと。街路樹にいろいろプレートがついていてきちんと書いてあるので、僕はそういうのを読むのが好きで、意外と見たりしているんです。5年前、10年前には違う街路樹だったりします。しかし、そういうことについて、なかなかその情報を得ることができない。だから一つは、基本的にはそういう身近な問題について、学校とかいろいろなところで勉強していくということに尽きるのではないかと。

一方、専門の情報通信分野の話ですが、ケニアではもう既に携帯電話の普及率が70％ぐらいになりまして、マサイ族もスマートフォンを半分ぐらい持っているそうです。スマートフォンを持つということは情報を共有するということになるので、そこで例えば写真を撮って、それを送るということが可能になってくる。そうすると、世界の果てにあるような地域の動物とか、あるいは植物の写真とか、あるいはそこでのコメント、動画ですら、我々は今ちょっとしたノウハウでスマートフォンなんかを使って、アプリを利用できるようになってきた。そういうことが実は教育の場でどれだけ取り上げられているかというと、多分非常に少ないのではないかと思うわけです。

一方で企業の問題を考えてみますと、私が言いたかったのは、利益追求だけを考えている企業というのは日本以外にもたくさんありまして、そう

いう企業と競争社会の中で勝負をしていったときに、環境問題とかいろいろなことを考えていくとやはりどうしてもコストが高くなり、そこでやりたい目標は非常にしっかりしたものがあるのに負けていってしまうのではないかと。理念はわかりますけれども、具体的にどういう取り組みをしていくかについては、やはり国民が生物多様性の問題についてもっと関心を持つ。そうすると例えば、旅行会社が生物多様性を理解するためのツアーを企画するとか、そういうことができてくると思うんです。今、遠足などをやめている学校も多いけれども、そういうことをテーマにした遠足をやったりすることができてくるんじゃないかということを考えました。

私ごとで申しわけありませんが、先日ちょっと暑くなりましたので、ビールを飲もうと思ってコンビニに行ったところ、ふと、たしかあるビール会社は売り上げの何%かは生物多様性の問題に関してお金を出していますということをうたっていたと思って、いつも飲まないメーカーにかえました。こういう競争なら、僕は大歓迎だなと。また競争という言葉を使ってしまいましたが、そういうことについてどれだけ理解できるか、つまり企業の努力がそういう目に見えるような形で伝わるのかということも、多分非常に大事なことではないかと思いました。

今回、報告していただきました大変多岐にわたる知見をこれからどうやって生かすか、個人として何ができるのか。それぞれの先生方のお話の中にありましたように、歴史的なことを考えたり、地域のコミュニティーの話とか、あるいはサンゴ礁など非常にテーマを絞って。あれはたしかきれいな卵を産むんですよね。この間は波があって見えなかったというのをやっていましたけれども、動画で見ると結構すばらしいものが見られるんですよね。それと最後に、生物多様性についての考え方はすばらしい日本人のよき魂をとり戻すことではないかと。大変、感銘を受けました。こういうすばらしい時間をくださった皆様方に大変深い感謝をさせていただきまして、つたないコメントでありますが、これで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

関谷直也

どうもありがとうございました。壇上から失礼いたします。いろいろな考え方を多様性の持ったまま整理するというのは、そもそも学問の役割です。日本人の古きよき心、また人として当然の事業活動を考えながら大もとのところを考察していくというのは哲学の仕事です。そういったことを本旨にしている我々東洋大学でこういったシンポジウムが行われたことは、ある意味この議論の経過点であり、出発になれたのかなと思っております。時間が超過してしまいまして、大変ご迷惑をおかけしました。これにて本日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

石井晴夫

本日はどうもありがとうございました。(拍手)これで東洋大学現代社会総合研究所主催の第11回環境シンポジウムを閉会させていただきます。なお、この後、交流会も用意してありますので、お時間のある方はぜひお残りいただきたいと思います。本当に長時間ありがとうございました。

(終了)